

波之鳥

第 3 号 1982



室蘭市医師親交会誌

波之鳥

第 3 号 1982



室蘭市医師親交会誌

親交会誌 波久鳥 目 次

「波久鳥」第三号に

室蘭市医師親交会会長

原田 一洋

1

記念アルバム

原田 一洋

2

三十年

詩 加藤治良・画 吉井正仁

4

お元気ですか——旧友通信

高橋 清蔵

5

房総・千倉町二十年

高橋 清蔵

7

旧会員住所録

池田 洋二

8

しのぶ草

池田 洋二

10

民生先生をしのんで

池田 洋二

11

父、国本亮平の若き日

国本 鎮雄

12

遺 句 (宮本素風・大久保東陽)

国本 鎮雄

14

物故会員遺族住所録

皆川 英貞

17

短歌

俳句 (三时会余滴)

機上九句 湊 武雄

18

わが青春

川口柳之助

28

羊羹色の羽織

川口柳之助

39

通らなかつた路

安斎 哲郎

40

グループ紹介

三火会 徳田・深瀬

17

モーターリストクラブ

鴨井 清一

28

編 集 後 記

表紙・題字 加藤治良

40

次

座談会

赤い灯・青い灯

出	席	者
東	阿部 昭治	佐藤 善弘
栄	他、編集委員	大岩 昌生
一	同	曾根 清孝

18

趣味と随想

古くてもよいものはよい……………高橋 陽夫

23

番外一号室……………加藤 治良

24

私と刀剣……………徳田敬太郎

徳田敬太郎

29

スキューバダイビングを始めて……………大川原修二

大川原修二

39

室蘭野鳥の会……………太田 克英

太田 克英

40

ゴルフ談議私のパッティング遍歴……………久安 正道

久安 正道

40

かなり古いお話(その二)……………小 雲 水

小 雲 水

40

ぼ や き……………阿部 昭治

阿部 昭治

40

森塚先生からの書簡……………

39

編 集 後 記……………

40

表紙・題字 加藤治良

40

カット 竹内隆一

40

「波久鳥」第三号に

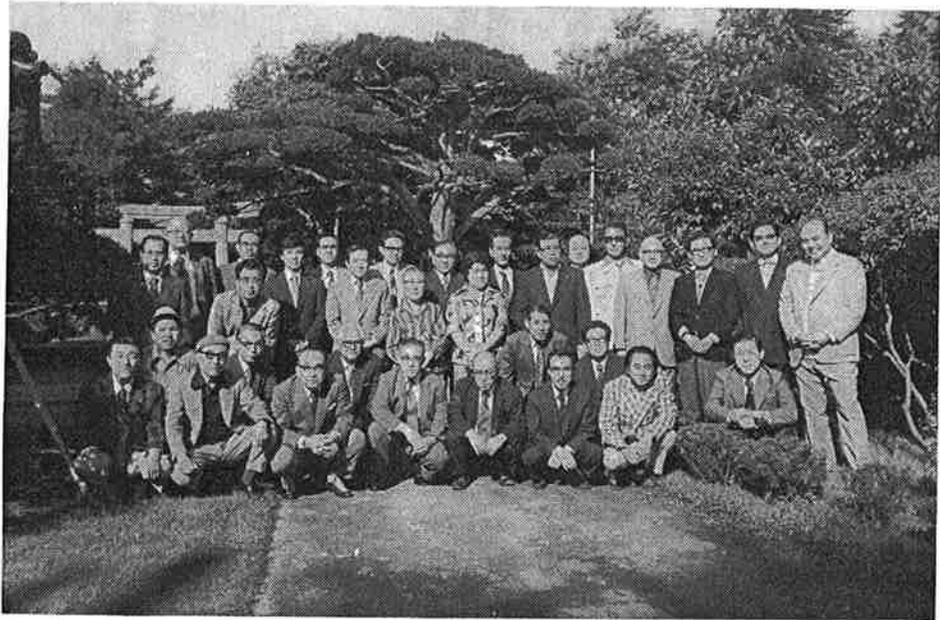
室蘭市医師親交会会長 原 田 一 洋

親交会雑誌「波久鳥」も号を追って充実し、ここに第三号の発行を迎える事になりました。同人雑誌などは、俗に三号雑誌と言われ三号くらいで、消え去るものと、永続するものとが別れる様です。本誌が永く続いてゆく事を心から望む次第です。

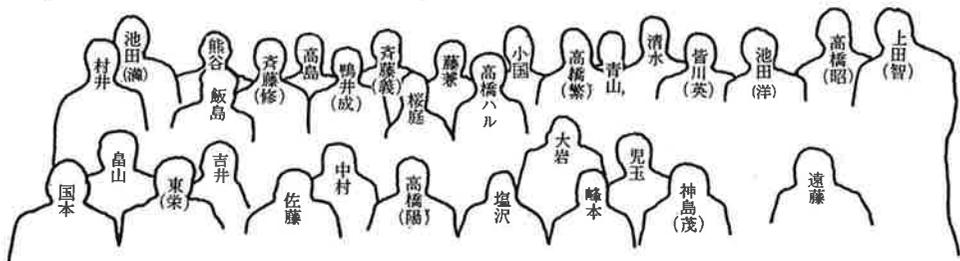
時あたかも、本年は親交会の創立三十周年にも当っており、事業部においては、かねての念願であった海外旅行に出発する事になっております。かつて、創立時の会長であった齋藤義太郎先生が、「そのうちに、ハワイにでも一緒に行こう」と言われた夢が実現するわけで、故齋藤先生もさぞ喜んでゐる事と思われます。

年末には旅行の話、波久鳥の話題、話のはずむ事を期待して、筆をおきます。

親交会記念アルバム

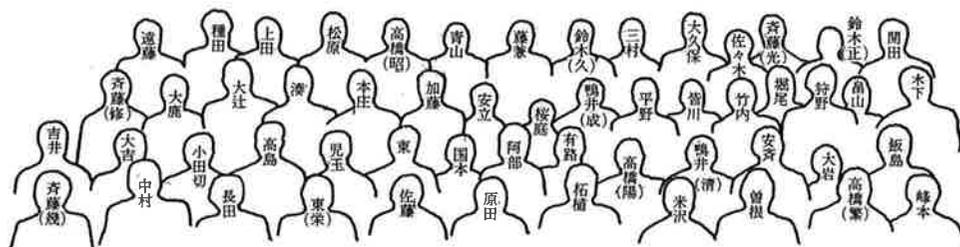


昭和51年9月 (蕙山苑の野外パーティ)





昭和52年11月 (常 盤)



生れた児は

父となり 母となり

蛙と虫の

住^{すみか}処^かだった野^のつ原^{はら}に

忽然と

シヤングリラ が生れ出る

三十年

ばかにならない歲月だ



吉井正仁・絵
加藤治良・詩

お元気ですか

旧友通信

房総・千倉町二十年

高橋清蔵

—上田智夫先生へのお便り— 57・8・31

(前略)

室蘭製鉄所病院を年満退職して老後の生活設計を熟慮し、人生の半分を闘った雪と寒さから逃げて、室蘭測候所の所長さんと相談して御意見に従い雪も殆んど降らず気候温暖で、一年を通じ新鮮な野菜と海産物に恵まれ、しかも郷里の山形とはそう遠くない永住できそうな住み心地のよい土地と決意して、房総半島の南端近くの黒潮洗う千倉町(半農半漁の外房に面した海辺の田舎町)

に居を構えた昭和三十七年十月一日から早や二十年になんなんとする歳月が夢のように流れ去りました。

退職当時、市内で開業しておられた産婦人科の森塚先生が内地に引揚げることになり、その後の医院をそっくり私に引受けられるよう指名されて当時の医師会長斉藤先生から呼出されて、再度熟考するようすすめて下さいましたが決意の程は変わらず、とうとうご辞退申し上げてしまい、斉藤会長先生や森塚先生には申し訳けない事をしたと思っております。

昭和三十四年八月七日、当時、東北大学工学部二年に在学中の次男が夏休で帰省中、友人に誘われて洞爺東湖畔にキャンプに出かけ、三日目帰宅寸前で水泳中思いもかけぬ不慮の水死を遂げ、今だに遺体が発見出来ず、静かに湖底に眠り続けている次男が可愛そうで、千倉に引揚げて来て以来、昭和三十八年八月七日の命日から必ず東湖畔の遭難現場に建ててやっただささやかな遭難碑にお詣りして、薄幸の次男の霊を慰め心から冥福を祈ってやる事を決意して、今年でちょうど二十回目の墓参を終りました。子に先立たれた親の心のうちは何とも説明出来ません。

この間、くしくも八月七日の命日に予期もしない有珠岳の突然の噴火に出会い、命の縮む心地で生涯忘れる事が出来ない経験も致しました。一昨年までは墓参を終えてから室蘭に立寄り病院を訪ねて、年々退職されて数少くなつた当時の先生達と一緒に勤務していた方々とお会い出来て、互いの健在を喜びあい懐かしい昔話に花を咲かせる事にして居り、更に札幌に寄って大学同期の先生を訪れ旧交を温め、思い出深い学生時代の良き、楽しい日々を偲んだり致しました。(中略)

千倉に参りましたから五年位は老後の生活設計である念願の畑仕事に専念する事が出来、周囲の農家の助言や見よう見まねで、さつま芋、落花生、オクラ、グリーンアスパラ、西瓜、メロンを始

め、ありとあらゆる野菜類を作ってみました。毎日の手入れも行きとどいて見事な収穫をあげ、温州みかん、夏みかん、梅、桃、栗などの果樹類も苗を植えて生長を楽しんでおりました。

こんな生活を続けていた処に、近くの鴨川市にある鴨川保健所長になられた今野邦雄先生（札幌医大出身）から目をつけられて先生の留守の時だけの手伝いという約束で致方なく引受けたのが始まりで、毎週水曜日毎の乳児相談を押し付けられてしまい、当分辞任を認めてもらえそうもありません。ついで十年前、拙宅のすぐ近くに開業した「みどり助産院」の助産婦さんが渡りに舟とばかり、何の縁もゆかりもない方ですが、故郷が山形の隣県の新潟県出身と申して再三の懇請に負けてしまい遂に引受け、妊婦と乳児の診察を行い、分娩の度に昼夜の別なく呼出されて手伝って居り、助産婦会員達からうらやましがられているとよく申しております。

さらに町内で耳鼻咽喉科を主として内科・小児科の看板を掲げて開業しておられる先生が、拙宅の近くに鉄筋コンクリート建三階の立派な病室だけの建物を新設する程の盛業振りです、外来患者に追われ病室回診が十分出来ないから、ぜひ手伝ってくれと頼まれ、設立の際、懇請されてよく考えもせず私の名を貸して居りましたので拒みきれず、治療面は一切干渉しない条件で毎週一回土曜日に出かけて、ほとんど治療効果もあがらないような老人ばかり二十数名を收容出来る有料老人ホームと言った方が相応しい各病室を廻って、血圧を測ってやったり訴えを聴いてやって励してやるような有様で、老人医療のむづかしさ、殊に無料老人医療の問題点が次第にわかって来たように思います。

開業の看板を掲げておらず、畑仕事などばかりで余程暇で困って居ると見られたらしく、五年前に完成した町立福祉センターの健康相談室の仕事を受けけるよう町長、町会議員から要請されま

したので、奉仕活動を条件に月三回出かけて一般住民の相談、主に老人が多く血圧測定と治療の相談を行って喜ばれて居ります。又、町内に沢山ある老人クラブの会合の際、中央公民館の要請で出かけては老人の健康保険の話や血圧測定を行って、一緒にご馳走を頂いて楽しく過ごす奉仕活動も度々あります。

県内の君津市にある新日鉄君津製鉄所関連会社従業員定期身検を請負っている県予防衛生協会から目をつけられて、以前、室蘭製鉄所病院に長く世話になった関係で致方なく引受けて、二年程前から一年を通じて毎月三、四回出かけておりますが、往復四時間ばかりかかる電車通勤が一番体にこたえ閉口しております。こんな生活を繰返して居りますので「晴耕雨読」の夢はすっかり狂ってしまい、畑の手入れも不十分となり作物の出来栄も低下するばかりで、畑作りが下手になったと家内から冷笑されるようになり、自分でも苦笑しております。（中略）

黒潮洗う太平洋に面した海辺の土地柄、冬も東京に比べて二、三度気温が高く、真夏は海風が吹いて涼しく寝苦しいと思う夜も余りなくて凌ぎやすい土地のようです。真冬でも菜種の花が咲いて観光宣伝の唄の文句にあるようです。

私もたいへんお世話になった親交会生みの親の一人であられた長田先生が数年前、室蘭を引揚げて千葉県北部の市川市にお住いですが、北、南に相当はなれて居りますので未だお会いする機会に恵まれず残念に思っています。何時の日かお訪ねして旧交を温め懐かしい室蘭の昔話に花を咲かせたいものと期待しております。歩行可能な限り、今後幾年でも八月七日の次男の命日には洞爺湖畔の墓参に出かけたいと念じて、健康の保持には十分注意して多忙な生活ですが、元気で過ごして参りますので、渡道の折には医師会の諸先生にもお会いする機会があるものと信じ、先生方の御健勝を心から祈って居ると、どうぞよろしく御伝え下さい

御元氣ですか

(旧会員)

(S57.8.10調べ)

氏名	転出年月日	現住所	電話番号	備考
森塚 威光 先生	S37.3.31	宮城県仙台市弓の町5丁目	0222-66-4663	
高橋 清蔵 先生	37.3.31	千葉県千倉町瀬戸2360	04704-4-0091	
仙仁 勝政 先生	38.3.31	札幌市豊平区豊平8条9丁目 第一ユーカラハイツ511号	011-841-0187	
熊谷 太市 先生	39.3.31	岩手県陸前高田市高田町字森の 前	01925-5-3487	
斉藤 省三 先生	40.3.31	東京都世田谷区桜上水4-15	03-302-3956	
稲葉 真 先生	41.3.31	茨城県日立市大久保町1-3	0294-36-0279	
加藤 和雄 先生	42.10.31	有珠郡壮瞥町仲洞爺69	01426-6-3232	三恵病院
今井 寅雄 先生	42.12.20	神奈川県鎌倉市浄明寺628	0467-24-0378	横浜市東急車輛診療所
松岡 幸七 先生	45.9.30	茨城県水戸市千波町395-2	0292-41-1400	
益田 祐治 先生	48.3.31	上磯郡知内町湯の里診療所	01392-6-2001	国立函館病院湯の里診療所
一方井卓四郎先生	48.7.31	静岡県静岡市大谷380-92	0542-37-3857	済生会病院
三好 晃二 先生	51.3.31	石狩郡石狩町花川南3条5-230	0133-74-0333	三好医院
飯田 孝雄 先生	51.6.30	網走市北10条西4丁目	01524-3-2486	網走保健所
久保 茂俊 先生	51.9.30	札幌市西区山の手4条1丁目	011-611-0859	久保医院(滝川市)
杉田 泰弘 先生	52.8.21	札幌郡広島町南町3-1-2	01137-3-5040	苫小牧保健所
斉藤幾久次郎先生	53.3.31	静岡県田方郡修善寺町柏久保 408-1	05588-3-2211 (病院)	静岡県中伊豆温泉病院長
松原 初雄 先生	54.10.6	室蘭市知利別町2丁目30-6	44-4562	
長田 広 先生	54.11.10	千葉縣市川市柏井町1-1791	0473-38-3526	
遠藤 雅之 先生	55.12.25	札幌市中央区界川3丁目5-19	011-562-0122	
峰本 正一 先生	56.3.31	札幌市南区川沿13条3丁目	011-571-8830	
伊藤 貢 先生	56.8.30	札幌市中央区南6条西3丁目 セントラルビル008	011-531-1124	
有路 智彦 先生	56.9.1	有珠郡大滝村字本町72	014268-6478	
黒坪 弘毅 先生	57.3.31	福岡県福岡市西区豊浜1丁目 14-17	092-891-4378	

しのぶ草

民生先生をしのんで

池田 洋 二



民生医院の佐藤知信先生が逝去されてから早や九年の年月が立とうとしていきます。先生は弘前の素封家の七番目の男子として生れ、新潟医大を卒業後、北大衛生学教室に入局され当時の教授井上善十

郎先生と共に上海同仁会病院へ赴任されました。昭和十二年とお聞きしていますが、その当時、小生は北大医学部二年であって同仁会の壮行式の模様は時代の変化として、いやでも中国の存在を意識した最初の出来事であったと思います。その後、先生は現地での召集があったように聞いておりますが、昭和二十一年春に復員し同八月港町の小熊整骨院跡に外科医院を開業されたのですが

二十五年に開業した私以上に物資のない窮乏の戦後生活で大変苦労なされたことと存じます。

私が時々お訪ねした頃、先生は手術に往診に大変お忙がしく正月も日曜もないような有様で、虫垂炎の手術など多い日には一日に六例もなされたそう、今の若い先生方には一寸想像も出来ない事ではなかったでしょう。時代が違ふと申せばそれまでですが、これには先生のバックボーンとしての医療に対する真面目な姿勢がはつきり裏打ちされて、見る人聞く人をすべて感歎させずにはおかなかつたのです。又、度々手術の見学に市立病院や日鋼病院へ出かけられて、自から乳癌や胆石の手術もなされたと聞いております。手術の後のビールを楽しみにしておられたとか。

最近では生物学エレクトロニクス等々の学問の集積に支えられて医療の進歩は目を見はるばかりですが、反面、人間性の不在を指摘されるようになりました。病氣はみてくれるけれども病人としてよくみてくれないとも言われます。佐藤先生が存命ならば何とおっしゃることでしょうか。すべからず医の原点に返れとおっしゃられるのではないのでしょうか。趣味として先生は尺八を奥様の三味線や踊りに合わせて吹いておられ、上手か下手かは別とし



て真に楽しんでおられたようです。

花火大会の夜など、よく呼ばれて先生の医院の窓から見える花火の光と音とを肴によくビールを御馳走になったものでした。余り口数の多い先生ではありませんでしたが、皆と飲んだり話したりがお好きのように思いました。あの元気ががっちりした先生が

父、国本亮平の若き日日

国本鎮雄



(出生) 私の父亮平は、明治二十年五月四日、岡山県美作国美川村に、貧しい農家の十人兄弟姉妹の末っ子として生まれた。二十四年七月一家を挙げて、屯田兵として、上川郡永山村に入植した。当時四才の父には、年令の近い姉達と近くの小川で魚をすくって遊んだ思い出ばかりで、入植時のきびしい生活の記憶は、なかったようだ。

(五才で小学校へ) 昼間遊び相手のいない父は、近くの分教場へ姉達について通った。毎日教室の隅っこに、じっと坐りこんでいる父に、先生は見かねて、机を与えて呉れた。先生の好意に感激した父は、最も熱心な生徒になってしまい、二年生、三年生

悪性の肉腫におかされて東京の癌センターでお亡くなりになろうとは誰も考えなかったことでした。

現在、先生の霊は室蘭安楽寺に奥様と共に安らかに眠っております。御冥福を祈ります。

(昭和四十八年十二月十七日不帰)

の分までも理解してしまつたようで、翌春正規の一年生になったとき、二年生に上るのだと言つて、きかなかつた。

(小学校卒業) 明治三十三年尋常科四年と高等科二年の小学校を卒業したが、勉強好きの父は、家業を手伝いながら、通信教育で中学の勉強を始めた(十三才)。

(就職) 毛虫嫌いで七男坊の父は、農業以外の仕事で身を立てようと考へていたが、奨める人があつて、十五才の時、村の郵便局に勤めた。間もなく、札幌へ出て半年間の講習に参加し電信技術員(ツー ツー トン トン)の資格を取つて、永山郵便局員となつた。十六才、月給拾壹円也。日に教通の電報を処理するだけの仕事であつて、暇があり、また中学通信教育の勉強に励んだ。郵便局長は理解を示して呉れたが、たった一人の先輩局員は屯田兵の小粋が中学校など目指して生意気など、ことごとにつらく當つた。これが、かえつて負けず嫌いの父の向学心をかき立てた。後にこの局員は私の恩人だと、父がよく語つていた。

(独学で中学四年に) 明治三十八年、父十八才の秋、父の兄達が日露戦争から凱旋した(一人は奉天で戦死)。この兄達に、東京へ出て勉強したいと相談すると、一廻り(十二才)ほど年上

の、養子に出て七師団軍医大尉になっていた兄が、医者になることを条件に、援助して呉れることになった。三十九年春、勇んで上京し、神田に下宿して予備校と英語学校へ通った。同年十二月東京郁文館中学四年の編入試験を受けて、父の日記の表現によると幸運にも合格した。どれほど嬉しかったことであろうか。長い長い父のひたむきな努力が報いられたのであった。

(中学生活一年半) 郁文館中学五年生の春、鎌倉、逗子、金沢文庫の一泊修学旅行があり、秋にも箱根から熱海の旅行があって、屯田村から出て行った父には、生まれて初めての素晴らしい思い出となったようである。

(明治大学) この中学教育の影響か、父の志向は法律と政治に変わってしまい、四十一年こっそりと明治大学へ進み、四十三年(二十三才)法科生となった。このことが兄に知れて送金を打ち切るとおどかさされ、止むを得ず、四十四年明治大学を中退して東北大学医学部へ進んだ。波乱に満ちた父の青春時代は、父を晩学晩婚にしたが、法学の基礎を身に付けて、後年医療とともに医政に活躍できる素地を作ったのであろう。

(東北大学) 医学部では、年長(二十四才)の故をもって、クラス代表に推され、心機一転医学に打ち込み、楽しい学生生活を送った。室蘭から出て来た中学生の南条徳男氏と同宿になり、意気投合して生涯の友となった。

(医師となる) 大正五年二十九才で卒業して医師となり、和田耳鼻科へ入局した。間もなく友人宅で知り合った当時のミス仙台と結婚した(美人薄命とか、五年後に二児を遣して他界した。私の母は後妻)。

(室蘭へ) 翌大正六年室蘭製鋼所病院に勤務することとなり三十歳の誕生日を卜して、五月四日に着任し、第一線臨床医のスタートを切った。

(終り)

遺句

宮本素風

月の巖哀しきアイヌ物語

郭公の一日を句碑と暮しけり

黒百合に海霧のすさぶる季節くる

秋晴れの暮れきしときの無色かな

心身の柔軟ほしと寒稽古

大久保 東陽

ホ句の友女にもあり賀状来る

少年等何か釣りやり水芭蕉

古代文字崖に刻まれ草茂る

燈台の崖をいろどる千草かな

太郎柿買へば次郎柿まけくれし

御冥福を祈ります

(物故会員)

S 57. 8. 1 調べ

会 員 名	没 年	御遺族	御 遺 族 の 住 所	電 話	備 考
大久保慶之助先生	S 42. 1. 19	洋平 様	室蘭市中央町 3-6-11	0143-22-3557	
水野谷貞寛 先生	42. 2. 18	美恵 様	室蘭市中央町 2-8-5	0143-22-7588	
斉藤義太郎 先生	43. 5. 5	テル 様	室蘭市中央町 3-5	0143-22-2373	長男義寛様室蘭市宮の森町
中村 孝 先生	45. 3. 13	妙子 様	室蘭市中央町 2-7-19	0143 22-2322	
中島 勝美 先生	45. 1. 18	愛子 様	室蘭市輪西町 1-35	0143-44-5633	
米川 元重 先生	47. 4. 20	美代 様	札幌市中央区宮の森4-12-872	011-644-4876	
宮本 栄二 先生	47. 10. 4	ひさ子様	室蘭市幸町 2-3	0143 23-3335	
佐藤 雄三 先生	48. 5. 13	敬子 様	東京都新宿区市ヶ谷富久町60	03-359-7090	長女 今野敬子様
佐藤 知信 先生	48. 12. 17	知義 様	札幌市西区山の手6条7丁目27	011-642-8586	国立西札幌病院勤務
神島 辰雄 先生	49. 3. 10	かなめ様	室蘭市東町 2-23-1	0143-44-0841	長男茂夫様 室蘭市東町
国本 亮平 先生	49. 9. 22	亮太郎様	伊達市山下町92	0142-23-2241	三男鎮雄様 室蘭市輪西町
工藤 和雄 先生	50. 2. 19	富美 様	室蘭市知利別町 2丁目11-3	0143-45-8349	
上田米三郎 先生	50. 2. 28	君子 様	室蘭市中央町 2-9-9	0143-22-7910	長男智夫様 室蘭市中央町
木谷 秀次 先生	52. 9. 26	静子 様	札幌市新琴似町 7条2丁目 新琴似ハイツ216	011-762-6729	
高橋 繁介 先生	54. 4. 27	純子 様	千葉県君津市広岡芙蓉マンション 850号	0439-29-3675	
平野 広志 先生	54. 8. 10	光子 様	室蘭市清水町 2-5-9	0143-23-9566	
古河千代美 先生	55. 2. 29	富美 様	函館市五稜郭町20-15	0138-55-5361	長男 廉一郎様へ転出後没 (函館市)
有賀 文伯 先生	55. 4. 3	多賀 様	室蘭市東町 2-25-16	0143-44-1260	長男 和雄様 室蘭市東町
青山政太郎 先生	56. 5. 26	芳江 様	東京都大田区蒲田 4-1-11	03-737-0185	S 54. 5. 30 東京都へ転出 後没
細谷 俣 先生	56. 9. 26	幸枝 様	札幌市中央区大通西19丁目 1-29 シャンポール大通605号	011-644-5196	
大西 清 先生	57. 6. 9	穉子 様	室蘭市東町 2-25-16	0143-44-5659	

短歌

三時會余滴

皆川英貞

隔てなく 睦み集ひて 二十年か

三時の朋友は 有難きかな

濃く淡はく 飲み喰ひ打つの 娯楽を

守り続けて 二十年過ぎぬ

手にとれば 二十年の歩み 鮮明に

日記に残る 朋友の面影

或る時は 旅に温泉に 蓬萊に

生きる歡喜 噛みしめてけり

明日への 糧となりたり 三時會

おやつのは 忘れがたけれ

月一度 所懐のまゝを 語りあい

本音建前 心情通へり

君歌へ 共に語らん 酒汲まん

時間を忘れて わが道を往く

二三四六十と 盛りあげつ

卓を囲める 友の輪嬉し

五十七年八月二十周年を迎えて

機

上

九

句

湊

武

雄

爆音も心たのしく離陸する

断雲の切れ間に青田のごばんじま

廻転の四発動機音もなし

あれあれが金華山の沖なるよ

岩盤山チヨッピリ頂雲あたまに見ゆ

ごばんじま賽の目うるわし仙台かな

スチユーワード親切丁寧に嘔物処理

子は喜々と酔いたる母を手こずらす

フワリフワリ雲中行に睡気強し

俳句

わが青春



羊羹色の羽織

川口 柳之助

本誌は一種の集団たかりではないか。活字氾濫の平和ムードには怒りを感じます。だが敢えて筆を執ります。眼が疲れまじゅうが、少し我慢して下さい。私の前身は応援団長です。面白分に考えて居られまじゅうが、それは表面だけを強く見られるからでしょう。尤も羊羹色の羽織に太い白く

て長い羽織紐、脛の出るポロポロ袴、太い鼻緒の大きい高下駄、髭面、長髪、どれ一つとっても異様な風態である。

私の時代は戦時体制で、全く灰色の時代です。校内には断髪令の掲示が出る。その張り紙を破って反対する者も居た。私の長髪も特別扱いにはしてくれませんでした。教務主任に呼ばれ再々注意を受けました。官憲の目は常に光って居たようです。

北海道の早慶戦、小樽高商（当時はそう呼びます）との野球試合は応援の花形でした。試合は春秋にあるのですが、試合が近づくと、応援に就いての協定が行われます。両校応援団幹部が集まり、太鼓は幾丁、幟は何本と決めるのです。それが、なかなか決まらず大論戦となります。その年は太鼓三丁、幟り十五本に決まったと思います。野球戦当日（秋）、春にも負けて居たので秋にも負けた時は、応援団同志で戦斗を交えようと幹部一同決心していました。

試合当日、市内デモンストレーションに団員全員、街を練り歩く、その後、札幌駅頭に小樽高商団員を迎えに行く、その時障子紙に大きな字で書いた歓迎の辞を読む、その紙は地上に長くはためく。（今はトイレットペーパーらしいです）高商の答辞があつて、両校団員合せて四千人位であつたと思ひます。試合は北大が次第に旗色が悪

くなつて来ました。すると、何処から持つて来たか法華の太鼓をならし、笛を吹く者が現われた。応援野次も「北大くずれ」（当時は北大と小樽高商と掛け持ち受験が出来て北大に失敗した者は高商へ行つたものです。ここから出た野次でしょう）一方「お教坊主」と来る（当時都ぞ弥生の寮歌はテンポを長く伸して歌つて居たからでしょう）野次は次第に嵩まつて行く。

暫らく応援合戦が続くと、小樽高商の幹部が三人で抗議に来ました。法華の太鼓と笛はルール違反であると言う。両校幹部の激突となりましたので、私が入り旗竿で高商幹部をマーマーと押えると北大幹部の旗竿が高商幹部を殴り始めました。高商幹部は這々の態度で自分のスタンド側へ帰りました。

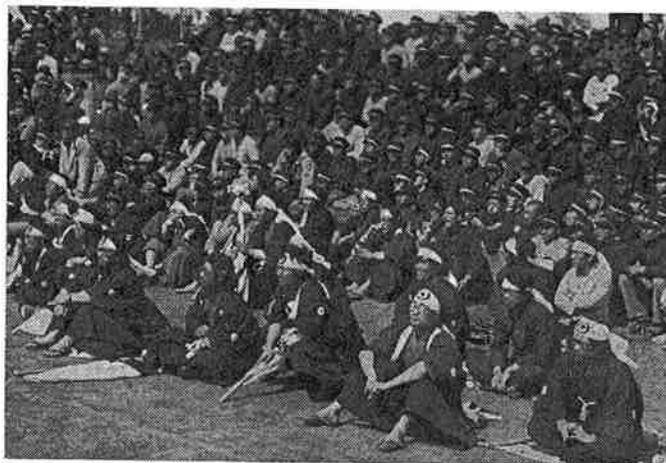
又、応援団席を見ると、制服制帽で観戦して居る巡査（ポリ公）が二人居ます。幹部に巡査の意向を尋ねさせると、返答が曖昧である許りでなく、喧嘩があると聞いて来たと言う。我々の秘密の決意が何処から洩れたものであろう。私服ならまだしも制服制帽で校内へ入るとは、自治、治外法権を知らぬなど旗竿で帽子を釣り上げ、叩きのめすように校門の外へ追い出したりしました。

試合の終つた夕方は御多分にもれず、狸

小路(当時札幌で一番賑やかな通り)は団員でいっぱいでした。残念会の一杯が入っているので友人同志、幹部連と共に道で会々とストームが出る「札幌農学校は蝦夷が島荒野に建てたる大校舎、コッチャエーコッチャエー」、足駄でアスファルトを踏み鳴らすから物凄く音がする。今考えると狸小路住人は良く許してくれて居たものと思います。夜も更けて十二時頃団員も減り、引き上げようと、薄野交番を見ると、三十人位の団員が二本の白線帽を被りながら捕えられて居る。中に入って見ると、公務執行妨害であるとか、道路で小便をしてよいとは六法正書にないとか色々説教をされて居る。之はイカンと思い、直ぐ校内へ走り、学生課へ行き課長の在、不在を尋ねる。勿論、宿直者だけである。直ぐ課長宅へ電話する。事情を説明すると直ぐ行くとの返事であった。朝三時頃には交番には誰も居なかつた。課長が貰い下げてくれたのである。ホットして帰る。

毎晩、各部応援激励に行く。夏期休暇が近くなると各部合宿練習に入る。当時二十部位あったようである。土産に燻製を持ち激文を読む、一杯飲む。毎晩であった。一日たりとも自分の時間がなかつた。コリゴリした。

或日先輩団長が来て、六時迄に幹部全員



を集めておけと言う。行って見ると、支那服姿の先輩団長が居る。色々過去の面白い話があった。お前達はなつちよらんとの説教もあった。支那服のいわれを聞くと蔣介石暗殺に行ったのだが警備のものに見つかり逃げて来たと言う。もう少しで成功したのだがと言う。ピストルを出して見せてくれる。成功して居れば歴史は変わって居たろうと思います。この団長は北大農学経済

部卒と東大経済学部卒の資格を持って居る東大卒とは秀才ですねと尋ねると、馬鹿言え、東大総長急用ありと電話した。車でやって来た。同乗のうえ短刀でおどし入学許可をもらい、卒業も約束させたのだと言う。夏には各部遠征の応援に行く。京都へ行った時、サッカー試合場に白装束、高下駄の男が現われ団長はお前かと言う。そうだと返事をする、私は誰々だ。直ぐに先輩団長と判った。自分の一人が「どうしやしよう」と言う。「お前達北大に応援してやれ」と命令して居た。京都の顔役だったようです。

軍隊に入って満洲に赴任した時、一通の手紙を受け取った。持って来たのは満洲の民間人であった。内容を見ると会う場所、時間が指定してあった。部隊のものに相談すると、あれは匪賊で、行けば殺されるであろうとの説明であった。然し、男子の汚券にかかわると思ひ、行って見ると確かに匪賊の集団で、その隊長であった。恐る恐る尋ねると、第何代北大団長であると言う安心して意気投合。大歓迎を受け、御馳走になって帰隊した。隊の者は吃驚して居た。又、当時は秋、北海道大演習が予定され天皇行幸が決まって居た。新築農学部校舎の一部が御座所になると言うので、学生間には「天ちゃんが来る」の話題でもちぎり

であった。校内では良かったが友人三人と街へ出た時、大声で「天ちゃん」が来るとやった。その瞬間、サーベルがガシャガシヤと来た。当時のポリ公は腰にサーベルをつけて居た。友人の一人が逮捕された。翌日帰って来たので経過を尋ねると「天ちゃん」は不敬罪だと言う。言わぬ、言った、が水掛論で釈放になった。面白くないから飲んだ。今晩はお前の所に泊めてくれと言ふ。どうしたのかと尋ねると、布団を質屋に全部入れたから布団がない、泊めてくれだ。受け取る質屋も質屋なら入れる者も入る者、只あきれ許りであった。

まだ色々ありますが、小学生日記になりそうなので、これ位で筆を置きます。

「通らなかつた路」

安斎哲郎

ロバート・フロストの詩に「通らなかつた路」というのがある。人生の至るところにある岐れ路で、深くは考えずに何の気もなくその一方をとったばかりに、行く末が思いがけなく大きく変わってしまうという

ことを、森の樹蔭の小徑にたとえて歌ったものである。

今から十年前に、急に室蘭への赴任がきまつたあわただしいある夜の、私のために開いてくれた送別会の席上で、私はこの詩を引用して、「しかし後悔することはないだろう」と結んだものである。

考えてみれば過去の半世は次から次へと現われる岐れ路で、本当に何の気もなく、その一方をとり乍ら進んできた半世であった。多分こんな感慨は私以外のどなたでも同じことなのであろう。

わが青春というのが、編集子から与えられた課題であるが、先ごろ発刊された「北大予科開校三十年記念誌」に「私の高校時代」と題した拙文が載っていることでありそちらをお読みになった方も少なくないと思うので、重複は避けることにしたい。

まず手はじめは高校の進路選択であった就職の難易だの将来性だのについての計画も見透しもなく、親にも相談することもなく、全く何の気もなしに文科甲類を選んだ一学年九十人の中で文甲は十四人だけだったから、私の選択は当時の時流からみれば少数派である。当時、英米の近代詩に夢中になっていた。ことにエマソン、ホイットマン、ソロー、ホーソン、ポー、ロバート

然別な世界と割り切って何の矛盾も感じなかったからである。もう一つ私を夢中にしていた音楽は、さいわい盟邦独伊が主流派だから、暗幕を張りめぐらした暑い練習場でゲートルばき、背に鉄カブトで汗まみれになりながらオーケストラも続けていた。卒業も間近いある日、横浜戸塚の日立工場でモーターの部品をつくる旋盤を廻している時に、ふと医学部に入ってみようと思ひ立った。こうして私は「間違つて」医者になつたのである。

大学卒業は昭和二十三年九月。交通事情のひどい当時としては、北海道という所は遙か海の彼方の、さいわい住むと人のいう別天地のようにも思われた。せめてインタンの一年間でも、シヨッパイ河を越えてみようか、と思ひ立つたのが、のちに準ドサンコになるそもそのキッカケであった。こうして札幌医大の開闢にたまたま行き当つたばかりに、北海道に根が生えたのである。

内科学の中で、肝臓病と神経内科とを専門と僭称することになった契機も誠に単純なことだ。天邪鬼の素質があることとみえて、他人のあまりやらないことをやってみようと思つたからにすぎない。肝臓病学の現在の隆盛をみるにつけ、あの当時肝臓病学に足を踏み入れるにはどうしてあんなに勇氣

が必要だったのかと、今昔の感にたえない
そればかりか、一九五六年の英国留学の際
には、それまで無縁と思っていた化学など
を、医学部生化学ではなく、理学部有機化
学教室で専攻する破目になった。不思議な
もので、自分で抽出やら合成やらをやらさ
れているうちに、無意味にみえた冷たいカ
メノコが、さまざまな表情をもった人の顔
にみえてくる。五炭糖は女性、六炭糖は男
性、という具合で、それもリボースは片エ
クボ、アラビノースは眉をすり上げてい
るうちに米國に留学した時には、免疫化学と
いう、これまた当時新しい分野で盲蛇にお
ぢずを実地でゆく経験をした。

「わが青春」とは何歳までをいうのが常
識かは知らないが、自分では今でも少しも
年を取った気がしないから、相変わらず多
方面に好奇心を燃やしている。門外漢のく
せいに心理学の本を書いたのもその一つだ
が、音楽関係の翻訳やら、埋もれた名曲の
発掘復古演奏やら、一方ではB型肝炎のこ
とやら、自分でも俺はマニーかなとつぶや
きつつ、三人前の仕事をすればそれだけ長
生きするのと同じことだと広言して、どう
にも止らないわが半熟年の青春である。多
分「二兎を追うものは一兎をも得ず」とい
うことわざの意味がわかる時が、わが青春
の終焉であろう。

—グループ紹介—

三 火 会

当会は、昭和三十年代の終り頃、私医大小
児科の南浦邦夫教授が、日鋼健保組合のお招
きで、年に一度当地にみえられる折に、先生
の教室関係の当地在住者（新樹会員と申しま
す）が教授を囲んで一夜を楽しむのを恒例と
していたことが、当会発足の母体となりました
で、その後、南浦一門のみでなく、室蘭市、
登別市、伊達市在住の小児科の先生方にもお
集まりを戴くことになり、更に少なく
とも二カ月に一度は幹事持ち廻りで会を開く
とすることになり現在に至っておる次第です
会は、一回毎に、麻雀か勉強会として、勉
強会の講師は勤務の先生方をお願いし、貴重
な症例報告やら、最近の小児科の話題とか、
或は当地方での流行病、新薬の紹介、学会報
告等、なかなか多彩でございます、益する
ことが多くございます。

発足以来、市立、日鋼、新日鉄の各病院に
は優秀な先生方が随分とおいでになり、日常
診察面でも、諸先生方に気軽に尋ねること

とが出来、その度に丁寧にお教え戴いて、誠
に有難く存じている次第です。

現在会員は、室蘭市立病院の、東海林黎吉
新飯田裕一、佐藤範宏の三先生、伊達市赤病
院の大川澄男、林北見の両先生、登別厚生年
金病院の元川卓先生の外、開業医では、中村
秀、大鹿栄達、高橋昭三、遠藤征子、神島恵
子、吉田勝太郎の先生方と、私共二人（徳田
深瀬）を加へ計十四名でございます。

小児科も数年前より、小児科学会とは別に
小児科医会が全国的に結成され、医療費の改
定、小児科医認定制度の検討、生涯教育の一
環としての小児科セミナーの開催など、活発
な活動を行っておりますが、私共もその様な
運動に力をつくし、又、若さを失はず、五十
才？いや七十才？の手習いをモットーにして
全員揃ってよく遊び、よく学んで参りたいと
考えている次第です。

（徳田・深瀬）

座談會

「赤い灯・青い灯」

佐藤善弘阿部昭治
東榮大岩昌生
曾根清孝他、編集委員一同

話は常盤から

司会 昔の先生方が一番思い出になるのは、やはり「常盤」が中心と思うんですがその辺から、佐藤先生。

佐藤 うーん、あのね。俺と中村先生とで幹事をやったわけさ。中村孝先生ね、酒は持ちこみで。そうしたら金が余ったんで喜んでね。中村先生と東先生と三人で階下におりて来て——

東 いつころ？

佐藤 斉藤会長の頃、新年会さ。余った金どうするって言ったら、皆で分けてもそれ程の額じゃないからって三人で飲んでしまった。ところが後日あととになってからビールと酒代を取りに来た。払ってなかったんだそれを、すっかり忘れてた訳さ。

東 そんなことあったかな。

佐藤 三人で三千円づつだったか割勘で払ったけど、たいした損害したことあったっけ。

阿部 損害じゃないさ(笑)

佐藤 宴会費は千五百円だったかな。二次会は別室でやった。千円会費でね。

——常盤に個人的に遊びに行ったことは。佐藤 いやあ、それはね。医師会としてなにかと名目作って皆、常盤や粹月に集ま

ってはやったもんですよ。

何の名目か判らんけど常盤で会合があるというから行くでしょう。道医師会からこんな事言ってきたなんて、大したコトでないのを聞かせられるわけさ。ハア—なんて聞いているうちに「判ったか」「判った」「じゃ、もういいだろう」って、これで始まるの。(笑)

二次会が千円。それから下々しもじもにおりてくるわけだけど、その時はバラバラさ。

——白鳥クラブを知ってる先生は——

東 おれ、知っているよ。

阿部 知っているけど遊んだことはない小学生だったもね。

東 昭和十五年頃、マネージャーを識っていたから「行くけどいいかい」「お待ちします」という訳でね。

大岩 昭和十五年っていえば、室蘭に遊びに来た時さかんにやっていたな。もつとも入れる身分でないから表から眺めただけ東 北海道でも大きい方だったよ。キヤバレーやカフェーだな。女給が六十人ぐらい。昭和十九年に建物疎開でこわした。いまの小公園の場所さ。

——それ以外の割烹は？(粹月、室川、松げん、千代本、鯉川、それから、それからと名前があがる)

曾根 親交会以前の話だね、それは。会



が始まった頃の話題でいこうよ。昭和二十五年以後の赤い灯、青い灯といえは、いま常盤一軒しかないよ。キャバレーだってAワン、キムラがない。ブラザー、現代もない。

大岩 二代目の白鳥もあった。

曾根 若いわれわれは粹月の下のローレルに行ったな、二次会でね。

佐藤 宮本先生が斉藤会長の帰宅だけはちゃんと確めないといけない、と言うから車呼んでね。それから俺なんかは飲み始めるわけさ。それまでは飲んでいても飲んだ気がしないんだ。まづ金は足りなくなるしね。(笑)

当時の強者たち

佐藤 量でいったら雄三先生(佐藤)だ
東 うん。強かったのは、やはり雄三君だったな。長田君と三人でよく飲んだ。

とにかく三羽鳥でね。ボクは輪西に帰るんだけど一時半か二時ごろ。二人はまだ残っているんだ。あとで、どうしたって聞くからね「あ、朝帰えりさ。」

あの人はオカズを喰べない。酒オンリーさ。朝からでも飲むんだ、空酒からざけでね。ずいぶん注意したんだ。注意するとね、酒飲むのにオカズ喰う馬鹿があるかって言うんだ

——浜町交番の世話になった事があったとか——

佐藤 あれはね。私も一緒に飲んだんだ。まわりでゴタゴタやっているから止めに入ったのさ。店で電話をかけたもんだから警察がやって来た。ついでに我々も引張っていかれた。すぐ放免、それだけの話。

東 うん、彼はやるんだ。ナンダっていうと、ナンダってやるんだ。そんな癖あったよ。

民生さん(佐藤知信)はおとなしかった。酒は好きだったけどあまり飲まない。松岡先生もおとなしいよ。私も何回か飲んだけどおとなしいよ。わりと早く酔っぱらうんだ。

佐藤 宮本先生とボク、家が近いでしょう。斉藤先生が帰るって言い出すまで居なきゃならない。斉藤先生が帰るって言えば松岡先生も帰る。二人が帰ってからボクと宮本先生が飲んだものだ。宮本先生は強いよ。日本酒だけだったが、そのうちウイスキーの味をおぼえてね。

東 当時は清酒きさけオンリーだったな。一晩に一升は飲んだ。

阿部 ウイスキーは十年か十五年前からだもの。

佐藤 ビール飲む人は異端視されていたしかし、ずいぶん飲んだな、二日酔いの連

続だった。

大岩 うちの方ではね、皆川先生がかなり飲んだ。量も回数も多かったナ。昭和三十年前後かな。むこうの方から狩野、皆川伊藤、深瀬、オレの道順で車でずーっと拾って来るんだ。自宅で晩飯喰べたことってあまりないんだもの。誰かが誘いに来る、そしてワイワイやっていると善弘先生に「幌別のやつ等のさばるな、少しつつしめ」って言われたよ。(笑)

東 輪西でもよくやっていたね。

曾根 ヴィナスにもよく行ったな。

大岩 あの辺にも二、三軒あった。

東 国本先生(父君)とは何回か飲んだがオトナしかった、静々としてね。

阿部 その前は？オトナしくなってるから皆知っている。その前がききたい。

(笑)

東 その前は……判ってるだろうさ——

ねエ。(笑)

曾根 あの頃は元気だった。お互いね芸者だってみんな若かった。二十歳前後だった居たもの。AロクスケVをおぶった人がいたって話、大岩先生に聞いた筈だけど大岩 ああ、あれかい。八芳園の坂を上って来たらロクスケが居てね。体格のいい若い先生がヤッとロクスケをおぶって走り出したんだ。もつとも婆さん30Kgもなかつ

たけどね。てっきり阿部ちゃんだと思っていただけなあ。(阿部先生、沈黙。どうやら人違いらしい)



お姐さんたち・余興

—— 医師会の宴会によく出て来た芸者さんと言うと——

大岩 三和クラブかい。ろくすけ……

曾根 てまり、あいこ

阿部 にはち、かつこ、ごんぱち、うめちよ、たけまる、ときよ、ときじろう、こせん、きんこ……

(たづこの名前が席の面々なかなか思い出せず)

満岡寺に行けば全部わかるさ。名前書いた提灯がずらっと並んでいるよ。献燈したのがね。

—— 花代は？——

東 いくらだったかな。

阿部 団体割引だったさ。

東 彼女たち、医師会に呼ばれるのを喜んでいたらね。安くしてくれたんだ。

曾根 あの頃、いちばん楽しかったな。

東 やすかったしネ。

—— 常盤には泊れたの？——

東 おお、泊れたよ。

阿部 ソレは出来ないことになっている

(笑)

大岩 玄関の前に離れがあったよね。

佐藤 あれはね。従業員が使ってたんだ

—— 余興だけど、三先生の揃い踏みは何時ごろから？——

佐藤 うーん。とに角、斉藤、柘植、松岡三先生のソーラン節が始まらないと医師会にならなかつた。恒例でね。

大岩 そう、斉藤先生の黒田節の踊りがあって、やや間をおいて、三人の揃い踏みがあったんだ。

阿部 中島先生は「手鍋下げても。」
佐藤 「オイトコ節」はうまかつたなあ

——大辻先生が「俺は村中で一番」——
曾根 オレは島の娘をやった。

——お姐さん方とのカラミをやった——
曾根 やった、やった。(ここで思い出す) そうだ。あれ、たづこだ。

東 たづこ、かつこ、てまりこの三人が医師会のトリオさ。

——北原先生は丘を越えてだったかな——
東 いや、童謡だ。

曾根 そうだ「黄金虫」だよ。黄金虫は金持ちだ……あれをやるんだ。

東 ボクは昔飲むばっかしさ。もっぱら。

大岩 先生は、お蔭、主税。
——三和クラブっていうのは——

阿部 芸者会館のことさ。医師会館みたいなもんさ。(笑)

曾根 事務長なんか居るの？
阿部 居ない、居ない。

曾根 会長も居ないわけだ。
阿部 そこまでは知らんな。

大岩 あれは法人かい？(社団法人でないかい、の声。大いに笑う)

大岩 いまでは、もう若手の養成は駄目かな。

佐藤 きびしい修業があるからね。志願者なんかいないさ。キャバレーに行った方がはやいもんね。

曾根 政府で半額ぐらい補助すべきだよ
民芸品とおなじだからナ。(笑)

会計はつらい

——曾根先生の前は佐藤先生が会計やってたでしょう。足出した時——

佐藤 ウン。足出したのは俺の頃さ。宮本先生が会計なんだ。宴会になると俺にやらせるんだ。もう終りですよ。と言ってるのに、酒が足りないから持って来い。そして金が足りなくなつて、皆から取れつて、後廻りとするのさ。

曾根 オレが会計やったのは、宮本先生と中島先生が会長の時。

東 とに角宴会費は安かったな。
佐藤 本当は俺、会計でないんだ。宮本先生なのさ。お前は室中の後輩だから言うことを聞けつて訳。何だと思つたら宴会の会計をやれ、簡単だと思つて引き受けたワケさ。とんでもないんだよネ。(笑)

三十年前という昭和二十七年、八年か。今井寅夫先生も会計していた。今井先生はね、奥さんが全部やっていたんだ。金が足りなくなつて先生に言うのと、奥さんのところへ行けつて。すると奥さん、皮肉たつぷりて飲んだ金なんか一文も出さないって言われて、マイッタな(笑)

道理で誰も今井先生のところへ行きたがらなかつたんだよ。

東 オレも一回目の理事やったけどねドンブリ勘定なんだ。ナニもないんだ。その時その時でやるわけ、誰がどうつてことないんだ。

曾根 赤字になると三月に臨時理事会を召集してね。文句言うやつは居なかつた。

佐藤 言う言わないじゃないんだ。取りに行きます、だからね。

東 予算も何もないんだ。なにせドンブリ勘定だから。

佐藤 いや、予算はあった。宮本先生と俺とで予算作ったことあったよ。信金の二階でやった時、始めて作った。事務長の細川善内さんによくオコラレたな。費つてばかりいるもんだから「あんた、一体何してるんだ」つてね。(笑)

曾根 真面目だったよネ、細川じいさんその頃の医師会員は三十三人さ。開業医はね。

佐藤 法人になると予算・決算をきちんとしなきゃいけない。そこで俺と宮本先生がやったのさ。斉藤会長から大雑把な予算が来るんだけど全然出来るもんでないんだ

東 ちゃんとやったのは何時から？
佐藤 昭和二十八年かな。

東 要するに、それまでは何もないん

だ。予算もなにもないんだ。

遠出

東 親交会の旅行ね、三和クラブの彼女たちを旅先きまで連れて歩いたもんなんだ。その話してみようや。

佐藤 鷺別の鯉料理でやった時、俺はひどかったな。芸者に頼まれてさ、先きに連れて帰ったんだ。あそこから鷺別の駅まで行くのはオドケでないんだ。遠くて……。

曾根 遠出で一番印象に残っているのは昭和二十五、六年ごろ、あれは親交会かな医師会だったかな。洞爺の万世閣の前に小料理屋あったでしょう。イクマツとか。北原さん、雄三さんなんかと飲みに行つてドンチャンやってさ——オレおっかなかつたナ。風呂に行くからって、パツと逃げて来たことあった。

阿部 おっかないって、なにが？

佐藤 氷がひっかかるんだよ。

曾根 医師会に入ったばかりの頃で、気持ちわるかつたもんナ。

(皆、なんの事やら、げげんな面持ち)

佐藤 ある先生なんかはね、連れてった芸者全部おっかけて歩いて、みんな逃げて中村(孝)先生と俺のいた部屋に飛びこんで来たんだ。

(先生は人畜無害かい?)

いや、俺なんか最も悪党だけどき、中村先生って人は酒飲まないし、余計な事は言わないしね。みんな逃げて来た。追っかけて来た先生もネ、中村先生が出てくると、居るのが判つても入つてこない。戻つて行つた。

大岩 定山溪の時ほね。むこうの温泉芸者も呼んだのさ。こっちの連れてった連中はお客さんだから黙つていれればいいのに、むこうが芸を出すから室蘭勢も出す。定山溪の連中はカッカと来るわけだ。斉藤会長は喜んで「やれ、やれ」ってケシかけるんだ。

阿部 こっちの方の芸が数等はつきり上だからオレ言つてやった。「お前らの芸とは柄が違うな」って。そうしたらね「そんな事、言いなさんな」よるこんでさ(笑)

東 斉藤会長も「そら見る、どうだ」なんてね。

佐藤 旭川でも朝里でも必ず地元の妓も呼ぶんだよ。唄わせて踊らせて、オレ達の連れて来たのはどうだ！って喜んでいるわけさ。次の朝は面白かつたヨ。俺も起されて松岡先生、斉藤先生なんかと彼女達つれて層雲峡に行ったのさ。

そしたら定山溪の芸者と仲良くなった先生方とパツタリ會つたんだ。二、三人だつ

たけど向うは具合悪そうな顔してね。

東 そんな事あったかい。

——その先生たち、別に部屋とつたの？

佐藤 いや、それは、そうでなかったよ朝いっしょに出掛けようって約束したらしんだ。

曾根 台湾では気をつけなさいよ。

大岩 オレは知らんぞ。(爆笑)

よき時代

——要するに今の時代よりモテた——

曾根 そうだ、モテたの。医者かモテたの。いまの医者はモテないの。(笑)

エーワンでも千円チップやつたらモテて大変だったよ。

阿部 某先生がキムラヤで女の子四人呼んでさ。三千五百円飲み代を払つて、チップを一万円づつきつていたそうだよ。あれならモテる筈だつて。

(一万円だつて？本当かい)

東 そんな御大盡いたの？

阿部 名前あげるかい

(マア、マアで勿論名前は発表されず、もったいないナの声)

——昭和二十年後半から三十年といえどダンスが盛んだつた——

曾根 波田さん(市立病院)が居たもん

ね。細谷、伊藤、池田、稲葉先生たち、俺もやった。あの頃は遊ぶところ沢山あったなあ、金も安かったしネ。いい時代だった……もう卒業だ。

阿部 昭和三十二、三年かな、まだ食糧難でネ。ホステスに夜食やらなきゃ誰も集らない。俺「現代」に毎日行ってたもんだから権利というか木戸御免でね。はねてから三階で一緒にウドンなんか喰べて裏口から帰ったもんさ。

曾根 オレ達の十年、二十年前、国本先生のお父さんの時代は、もっとモテたんだけ。Λ上Vの時代さ。われわれはΛ中Vさ。今はΛ下Vだ。あと三十年たったらΛ下Vになるよ。(爆笑)

司会 今夕は親交会創立の頃を中心に話していただきましたが、現在の中堅、若手の先生方、蘭東のサムライ達は次号に予定しております。楽しい会合でした。有難うございます。

曾根 次は、高島先生、飯島先生たちの番だね。(拍手)

おことわり——耳から文字への関係上、言いまわし、その他に多少ながら、ニユアンスの違いが生じたので不悪

文責 加藤

古くてもよいものはよい

高橋 陽夫

皆さんお晩でございます。

中学生の頃、習い覚えた「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず」という漢文の一節を、なんの感激もなく、ただ無心に、よく口ずさんでいたことを記憶していますが、その光陰を軽んじたばかりに、功なり名遂げることもなく、いたずらに年の輪のみ重ねてしまったことを、今更のように慚愧に思う次第でございます。

さて本日は、室蘭市医師会表彰規定によりまして、本会在籍三十年以上、満七十歳に達したものと、私共十二名はただ今会長から表彰状と記念品をちょうだいいたしました。この瞬間私は、うれしくないようなられしくないような、うれしくないようなられしいような、まことに複雑な気持ちがい었습니다のでございます。

大変勝手な言い分で、まことに恐縮に存じますが、私共といたしましてはこのままそっとしておいていただいた方が、自分の古くなったことなど忘れて、いつまでも若々しく、夢中で活動出来るのではないかと愚考いたすのでございます。すでに昨年十

月一日付で、医師会から突然に「このたび七十才以上の先生方には、年令の規定はありませんが、定時予防接種立会業務を休んでいただくことになりました。」との連絡を受けたのでございます。青天の霹靂とまではいかないまでも、人生うたた寂寥、いささかショックを覚えたのでございます。

私共はいよいよ、世に謂う高齡化社会の一員になったのでございますが、日本医師会恒例の表彰年齢八十五歳までは、まだまだ医師としてお役に立ちたいし、またお役に立つ積りでございます。

三十年四十年という長い間、諸先生方から、すでになくなられた先生方も含めまして温かい御同情をいただき、おかげさまでとにかく無事に、今日に至りましたことを心からお礼申し上げると共に、取り立てる程のお手伝いも出来なかつたことを、相すまないことと思つている次第でございます。なにはともあれ、私共は当医師会の会員でございます。会の規定に従ひまして、素直に喜んで有難く御厚意をお受けすることにいたします。

謝辞をとの御指名をお受けいたしました時は、ちょっと苦手のことと面くらつたのでございます。敢えて、不用意ながら思いつくままをしゃべらせていただいたのでございますが、果して、受賞者一同の気持

ちを代弁出来たかどうか、大いに憂える次第でございます。

以上簡単でございますが、諸先生方の一層の御健勝をお祈り申し上げ、今後ともどうぞ宜しくと申し添えまして、お礼の言葉に代えさせていただきます。どうも有難うございました。

(昭和五十七年三月二十四日定時総会に於て)

―大正つ子物語―

番外 一号室

加藤 治 良

昭和二十年十一月十一日、己おれは市立病院の院長室の扉を叩いた。

復員、帰蘭したのが二週間前の十月二十八日、終戦は京都府高槻市郊外の服部部落で迎えた。電気兵器工場の山中移転のため編成された(噂によれば海軍最後の)第五八一設営隊は作業にとりかかったばかり大阪周辺の若い兵隊がほとんどだから残務整理もたかが知れている。

三カ月の大半を京都市下京の産婦人科医院の居候で過した。副長の実家だった。戦火をまぬがれた古都を申訳けない程に

己は楽しませてもらった。牛のシモフリを自身で買ってこられる老先生は祇園、先斗町の顔もきく。「一力」の女関も拝ませていただき、南座の戦後初公演で初代吉右エ門の「松浦の太鼓」や「狐忠信」に感動することも出来た。

技術中尉だった中隊長の父君が小浜の網元だから若狭にも遊んで、石焼鯛、松茸狩の味も堪能した。

トランク一杯につめこんだカビ臭い煙草と毛布二枚、副長のおふくろさんから頂いた背広地一着、何冊かの軍医学校テキストそれにスケッチブック―それが復員土産だったから、報告をきいた親父は明らかに洩い表情をしたものだ。

「そうですか、海軍病院では外科でしたかまあ、とに角内科の津毛君に教えてもらおう事ですな。医学の正道は、あなた、何といっても内科ですから。」

阿木院長は子供の頃から存じ上げているあなた、が、あまた、に聞えた。そして「給料は小遣い程度でいいでしょう。」

これが軍医ではないドクターの顔なんだなあ、と改めて思った。食糧事情が好くなり次第、解剖教室に戻って屍体実習のシエーマ描きでもやろうか、と内心決めていた己だが院長の言葉はごもつともと合点できた

小遣程度はむしろ有難かった。当方から授業料を差上げるべきだと思っていたから「無給で結構です。では明日から参りませう。よろしくお願い致します。」

己の海軍式15度の礼に阿木院長は柔道スタイル、頭を下げて応えてくれた。

廊下に出たとたん

「やあ、いらっしやい。」

白髪瘦身なつかしいお顔だ。

「叔母さん、お元気?」

三年前、叔母の子宮筋腫のオベに立合

せていただいた長坂先生は

「そう、内科に来られる―結構、たい

へん結構。津毛先生に鍛えてお貰いなさい

あなた、しあわせ。」

それから

「院長に会われた?じゃ在室ね。」

すつときびしい表情に変わった。

第三種軍装の上下に半長靴、聴診器と弁当箱の包をぶら下げた己は、翌十二日〇八

三〇、病院の門をくぐった。白衣を持たなかったから医局のシュラン

ケから一枚拝借してボンボンと午前を過

した。午後の外来―河上先生の診療ぶりを

拝見していると電話が鳴った。外来主任の

小倉看護婦が

「あの―院長先生の回診について下さ

「いつて。」

「え、オレ？」

背中から先生、先生の声が追って来たが一瞬二瞬、己のことは気づかなかつた。海軍病院では部員、設営隊では軍医長だ。先生と呼ばれたのは誕生以来これが始めてだった。

「婦長さんが院内診察室でお待ちしているそうです。」

己の聴診器だった。

◇

子供の頃からの記憶で見覚えのあるような、ないような階段、廊下、病室を院長について廻る。礼を失せざる様三尺の距離を保っていたら

「かとう君、そんな遠くにいてはわからんでしょう。」

と叱られた。

とある階段下の物置きらしい部屋の前で立ち止る。

「居りません。」

「あ、そう。」

何の事かと、己は陣婦長にたづねた。

「ここ、なに？」

「バンガイ、イチゴ——です。」

海軍病院の掃除用具室よりも、はるかに薄汚ないらしい此の部屋が、実は、便利重

宝この上もない特別病室であることがその後おいおい判明してゆくのだ。

(二)

斉渡先生がやめられた。年があげ、河上先生も去られ新参者も忙しくなってくる。数少なくなつたスタッフ、ローティションのなかの小さな歯車の一つになりかけた。そんな頃、天然痘の大流行がこの街と周辺をおそつた。

追直の浜風に乗つた鯉のぼりが颯々と泳ぐ五月晴れの下、電信浜沿いの崖の上に建つ中浜伝染病舎は患者でふくれ上つた。

三十名をこえ、四十名を突破し、あれよという間にも四十五名に達した。畳一枚をベッドがわりに廊下にまで並べる始末、毎日毎日、午後からの中浜通いがはじまつた珍らしいことに津毛先生が欠勤された。

「おう、かとう君か。見る、これ仮痘だよ、カトウ。かとう君。」

玄関の式台に立たれ袖をまくつて突き出された先生の前膊に、バリオロイドが三つ四つ可愛い顔付きでくっついている。

威風堂々、厳格の化身に思えた津毛先生の口からすると出た見事な洒落に己はずっかり嬉しくなつた。

◇

四十八名を数えてから流行は止んだ。

残り少なくなつた痘瘡仲間の一人に上原謙さんも居た。もち論、加山雄三君の父君ではない。自称上原謙。とりわけ重症だつたせい、それとも何かの手違いからか一晚を番外一号室に收容された三十五才、独身のMさんだ。

峠を越したあたりから

「ボク上原謙です。先生は佐野周二さんですネ。」

かさぶただらけのニコニコ顔で言い出したものだから、てっきり脳症を起こしたに違いない、と己をあわてさせた。

生来のもつと判明して中浜通いが楽しくなつた。佐分利信と共に松竹三羽鳥といわれた天下の二枚目スターの一人だ。気分が悪からう筈はない。

「上原さん、どうです。今日の気分は。」

「ご苦労様です。佐野先生。」

名良婦長が大いに笑う。

退院には骨がおれた。番外一号の暗い密室に、また戻るのだと思ひこんでいるらしい。高熱とウワ言で過した夜の何時間だったのに、あの陰惨な部屋の印象はそれ程にも強烈だったのか。

「あの部屋はもうないの。上原さん、あなたのお家に帰るんですよ。佐野先生ウソを言ったことないでしょう。」

婦長は懸命だった。納得した上原さんは

己に握手を求めた。目をつむる思いで手袋を脱ぐ。粉っぽくガサガサした掌だった。

入院患者の大半が結核、しかも重症だ。

ベッドはふさがっている。

「空いているのは番外一号だけなんです」

△困ったな▽

「番外一号でいいですか、先生」

△よその科にきいて見ろよ▽

こんな会話が繰り返される一方、迷うことなき番外適のクランケがいる。

行路病のぢいさん。疑似コレラの船員。

チフスかもしれない夜の蝶。自殺未遂、そしてメチル中毒の沖仲士など。

メチル中毒は文字通り地獄の責苦だ。己にとって最初の症例は設営隊の下士官だった。ガソリンを飲んだと知るまでは、一体なにごとが起きたのかとオロオロし通した。

猛烈な腹痛、視えない不安、苦痛にのたうちまわって呼吸中枢が麻痺するまで、この責苦がつづく。

本輪西埠頭からの連絡で退庁間際にかつぎこまれたSさんも、番外一号のうす暗い裸電燈の下で七転八倒の末、亡くなった。呼吸停止後、しばらくは心臓だけが動いている——鬼気せまる異様さだ。

だから、街の悪友たちが時にはすすめる

ガソリン臭い飲物は、まづ口にすることはない。内科外来に割当配給される酒精を、要に応じ利用していたわけで、数少ない悪業の一つ、さらさら隠すつもりはない。

(三)

永島先生は頭髪について言うなら、天地さかしまのお顔に大きな目、肥満型だから（貴官と行を共にするは余にとって苦痛にも等しい）と部隊長を嘆かせたという一つ話は真実にちがいない。

津毛先生が開業された昭和二十二年七月から永島医長の二年間に続いて、塩之義医長へと時の水尾は消ゆることなく流れて行く。

医局、薬局、事務の顔振れも目まぐるしく変わった。世相、風潮にテンポを合せるかの如く古きは新しきに席をゆづる。十六名中十名が花の独身青年医者で占められた一時期さえ出現した。

街には飲み屋がふえ、アルサロ、キャバレーが新装開店し、労働組合と民主選挙と社交ダンスが老壮若の愉快な対立の中で盛んになって行くのだ。

◇

どういうわけか分裂症が四人、五人とつづいた。ショック療法をやろうか、という事になったのも番外一号なる格好の部屋が

あったればこそだ。

カルデアゾール静注は妙に恐ろしくて嫌だったが、電気ショックなら生々しい十分な経験が己にはある。

海軍病院は別府駅の隣一つ、亀川の地にあって市中に四ヶ所の分院を有っていた。

その一つ、海門寺病舎では村山大尉の発案でザコシン（坐骨神経痛）患者に電気ショック療法を——療法というより、むしろ診断の目的で行っていた。戦争神経症あるいは詐病と真物の神経痛との鑑別なのだが、通電痙攣後のもうろう状態で号令をかける「気をつけ——前へ進め」

条件反射的に彼等は歩こうとする、歩き出す、しっかりと歩を運ぼうとする。その様子を観察して大方の判断をつけようという訳だ。

海門寺で二カ月間、己はザコシン患者の左右こめかみに端子を当て電流を通していったから、青二才医者もこの時ばかりは阿木院長のごとく、永島医長のごとく威厳をこめ、胸を張って番外一号室の扉を開けたものだ。

定型的ケイレンが始まる。看護婦たちも真っ青になって震え出す。目をつり上げ、それでも必死にクランケの手足を押さえ、口にかませたタオル棒を引っ張ってくれる。健気な娘たちよ。

◇
娘さんがいた。十八才。春から初夏にかけて外来に通っていた。病名は神経衰弱。様子がおかしくなってきた。週二回の通院が三回になり、昨日今日と続くこともある。口紅が濃くなって、おしゃべりになって、裏の野原に咲いている紫の花を今度摘んできませう、などと言う。

「先生、変じゃないんですか」

己を冷かしていた看護婦たちも何かに気づいた。

両親共にすでに他界。長兄と叔母なる人に札幌行きをすすめた。がっくりと肩を落とし溜息をついて二人は納得してくれた。

「永島先生、家族はわかってくれました」報告すると、

「そうかい、ご苦労さま。——番外一号は空いていたのにネ。」

大きな目玉のまま、ニヤリと笑った。翌日の電話——長兄からと思ったら彼女本人なのだ。

「こんどの日曜日、八幡さんの境内で〃のど自慢〃があります。わたし出ますから先生、かならず来て。」

「先生、どうして来てくれなかったんですか」

月曜、午後の外来に現われた彼女を見て

己はぎょつとなつた。猫を喰べた後のように、口紅が唇を大きくはみ出し、恨みをこめた双の眼がジーンとオレを。

ごま化して、外来をとび出して、便所にかけて込んだ。申し訳けにしか小便は出ない真向いのレントゲン棟の草崖をながめる。タンポポはもう綿毛ばかりになって、紋白蝶が一羽、たよりなげに流れていた。

彼女は、だから、番外一号に入っていない。

(四)

四年目の秋が訪れる。

この季節が己は好きだ。海、空、それに野山が初冬に向かって色彩を少しづつ変えてゆく。エトモ半島全体が荒削りながら七つの光と色に溢れる季節だ。

その夜、己は当直だった。

内科医局のドアがノックされて病室主任の竹本看護婦が入ってきた。真剣になった時、彼女の鼻の頭には汗の粒々ができる。杉松さんの奥さんが一緒だ。

「娘がクスリのんだんです。」

言うなり奥さんは泣き出した。

杉松さんの御主人は五十六号室で咯血をくり返している。奥さんはマーケットの片隅で小さな一杯飲み屋をやっていた。

十七才の娘さんを見たことはない。様子をたづねて、心配は無いようだ。背負って

来ると言うから、何はともあれ
「連れていらっしやい。汚い部屋だけど周囲には判らないし、一日、二日模様をみるつもりで。」

「洗滌の用意しますか?。」

「ウン、しといってくれ。」

◇

洗滌の必要はなかった。

奥さんが差し出したのはブロムワレリル系の小瓶、十錠程の計算だ。娘さんはむしる気持ち良さそうに眠っている。

気づいたら、島谷、月野の二人が寝着の上に羽織をひっかけて立っていた。

「他の人に知られるの、当直の看護婦でもイヤだって言うもんですから——だから二人に来てもらいました。朝までついてくれるそうです。」

竹本がちいさな声で己に言った。いい配慮だ。うれしい心遣いじゃないか。朝が来て、このまま何事も無いと思った。

昼近く目が醒めた娘さんは、めそめそ泣いてばかりいたが。

「何だい、これ位のこと。しっかりするんだ。」

背を叩いて、院内診察室へ戻る。塩之義医長と杉松さんの奥さんが隅の壁ぎわに立っている——己を手で招いて

「ニンシンしているそらだ……。」

「え！」

「そう言うんだね、娘さん。」

目が赤い。奥さんの顔はゆがんでいた。

ギネを訪れるべく、歩きながら男の己は考えていた。

幸と不幸、歓喜と苦悩、情緒の両極で女性を揺さぶる、このニンシンなる言葉はいったい何だ……。

風が出てきたのか、廊下の窓硝子に黄葉が一枚はりついて慄えていた。

昭和二十六年二月六日未明、病院は火を噴いた。

医局、看護婦、薬局、事務の若手総員が病室を除く外来と廊下の壁、天井のペンキ塗りにせつせと励んだのが前年の秋だったから、火の走りは見事だった。

馳せつけた連中に混り、己も夢中で病室を駆け廻った。

入院患者の避難は無事に終わった。

煙の中から、時々おもい出した様に焰が赤い舌を見せる。横手の空地にたたずんでいる幾人かの黒い影に近づいたとき、青白い光の束が一条、二条と吹きあがった。

——何だろ——咬いたら

「エーテルですよ。ああた」
院長だった。

差し出した煙草に、手を横にふって後は黙然としておられる。

ふいと番外一号室の、あの微くさい匂いがした——と思った時、おぞましくもなっ

かしいあの部屋で付き合った一人一人の思いが驚く程鮮明に、己の脳裡を駆けめぐり始めた。

(番外一号室おわり)

モーターリスト・クラブ二十周年

鴨井清一

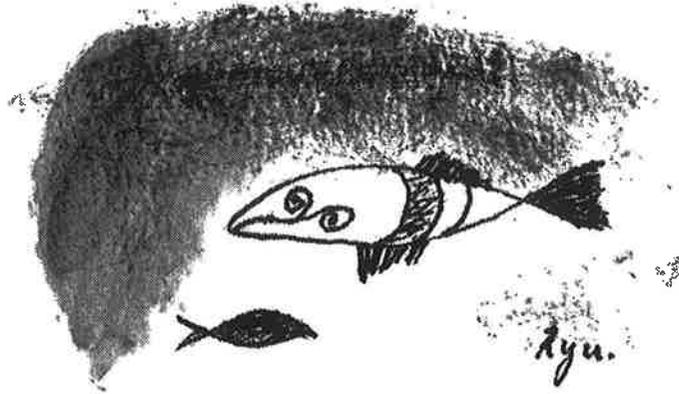
た次第です。

新制室蘭市医師会三十五周年、室蘭医師親交会三十周年に引続き、時を同じくして、当M.M.C.も、発会二十周年を迎え、昭和三十八年七月設立の往時を回顧して、感慨ひとしおのものがあります。

爾来、会員、其家族との相互親睦、救急時駐停車事項、法改正変更時講習会、パンフレット配布、夜間免許更新時講習会便宜供与、会報による会員間の連絡等に就いて努めて来



顧みるに、過去二十年間に、日帰り及び一泊二日を含め、二十三回のドライブを行い、東西は、十勝川温泉と千代田堰堤の鮭祭、及び景勝の瀬棚海岸、南北は、然別湖の紅葉とオシロコマ、並びに恵山のつつじ祭等を探訪し、又参加人員も、雷電海岸の一〇五人を筆頭に、毎回五〇〜四〇人を数える盛会振ります。又、今日迄、大した事故もなく過して来た事は、互に整然と節度ある運転を完了した為であり、誠に立派だと感心させられます。尚今後、増々進展するモーターゼイション時代に突入して、会員と自動車とのコミニケーションは、強くなるばかりであると共に、更に厳しくなる、交通法改正、救急医療時の折衝問題等に対処して、相互助け合うと共にドライブ等を通じ、会員間の親交を深めたいと念ずるものであります。



私と刀剣

徳田 敬太郎

刀剣に御趣味をお持ちだそうで、とよく会う人ごとに言われます。

私自身と致しましては、日本刀は、日本古来の美術工芸品と考えているのですが、一般の方々には、そう単純に美術品とお考え戴けないらしく、更に日本刀自体の良さについても、なかなか御理解がむづかしく日本刀についての説明に苦慮することが多うございます。

〃刀剣は王者の趣味〃と言われており、武器として使用されたほかに、宝物として権威者の象徴として、又は美術品としても扱われ、それ相応の地位と評価をえていたのであります。

即ち実用刀として消耗された反面、所謂伝家の宝刀として、大事に伝承されたものも少なくありません。

私が国宝の太刀のうち、初めて手にとつて鑑る機会を得た〃青江の康次〃（鎌倉時代初期、備中の名工）の太刀は、正治頃に作られたもので、以来、北條幕府より足利幕府へと伝えられ、更に將軍足利義昭より

島津義久に贈られたもので、同家重宝第一号に記載されていたもので、保存、手入れの状態も申し分なく、とても八百年も時代を経た太刀とは思えない健全なものであります。

又、初めての鑑定入札で、一本当りをとりました〃粟田口久国〃（鎌倉時代初期、建久頃、京都の名工）の国宝指定の太刀も全く見事の一言につきる名作で、且健全そのもので、一見、新刀かと思えうほど保存状態が良く、又刀身には、毛筋ほどの緩みもなく、その豊麗きわまりない地鉄の状態より、久国に入札し、当りをとったのですが、この様な名古刀が、少しも損われることなく、現在に伝えられていると言うことは、本当にすばらしいことだと存じます。勿論この様な名刀は、御物を初めとして、現在では、国宝、重要文化財、重要美術品に指定されており、昭和二十年代前半までは、その大半が、皇族、華族、政府軍部の高官、財閥等、特別な階級の方々には所有され、一般の人々の手の届かぬ所にあつた様です。

勿論、私共もその様な名刀は刀剣書を通じて知るのみで、とても手にとって鑑る機会とてなく、所謂、刀の本当の良さを知るすべがなかつたものでした。

それが戦後その様な階層の方々も、経済

的理由により、伝家の名刀を手放す方々が多くなり、昭和二十五、六年頃より四十年にかけて、前述の様な優刀が随分と一般に出廻る様になったものでした。(勿論当時は、それに便乗しての偽物の横行もはげしく、目に余ることもあったのですが……)

そして国宝以下の指定品を初めて手にとって鑑定愛刀家の諸兄は、その出来栄の見事に驚嘆し、国宝、重文、重美の權威に全く、敬服した次第でした。

この僅か十年余りの期間が、いわば名刀が一般庶民に開放された、非常に貴重な時期であったと申してもよいと存じます。

そして現在は、又昔の様に、一部の特別な階層の人々、又は博物館等に名品が集められており、又々私共より遠く離れてゆきつつある状況です。

と言うわけで、私の刀剣趣味の最盛期は前述の様に名刀が一斉に開放された時期に一致し、更に、村上孝介先生という本阿彌流の名鑑定家の知遇を得、現在では恐らく手にとって鑑定することの出来ないであろう数多くの名刀を、本当に堪能するまで、何時間でも鑑賞することができ、更に村上先生の丁寧な本阿彌流の御解説、御指導を戴きまことに恵まれた陶酔の一時期であった次第です。

最後に、私に過ぎた短刀一振りを紹介さ

せて戴きます。

短刀、銘、国光(新藤五)

裏銘、文保三年三月日

国光は相州鍛冶の祖といわれ、直刀短刀では、同時代の藤四郎吉光と並び称される名人で、その作刀は、当時の私にとっては高嶺の花で、一生のうちに一度でもよいから手にとって鑑定したいものと、念じておったのですが、誠に幸運にも入手することができ、私に過ぎたものの一つとして大事に致しております。

本刀は刃長八寸二分、ふくら枯れ、重は薄く、肉反りの誠に品の良いもので地景のよく働いた強い地鉄と肌が見事に調和し、刃文は焼幅の狭い直刃でよく沸え、沸えの働、金筋、稲妻等、その見事さは全く驚嘆の一語につきまます。

年紀銘のある国光在銘現存作は、重要文化財五振、重要美術品二振を含め、全部で十五振と言われ、そのうちの一振が私の手許にあることは、本当に有難いことだと思っております、十二分に楽しませて戴きながらも、損うことなく、次の時代に伝えてまいりたいと存じております。

これからも、名刀を鑑賞する機会を感謝しながら、剣友と談笑し、楽しい趣味の日々を持ちたいものと考えている次第です。

スキューバー

ダイビングを始めて

大川原 修 二

スー、ブクブク、スー、ブクブク、レギューレーター呼吸音が突然耳についた。深さ七メートルほどの海中にて、もう三十分ほど体長三センチぐらいのオトヒメエビの写真を撮ったり、ヒゲをついたりして遊んでいた。三六〇度まわりをぐるりと見まわす。海中は相変わらず透明度はよく、半年ぶりの沖繩の海は太陽の光が入ってきて極めて明るい。一回目の潜水は、そろそろ終りにして、ガイドと一語に潜水している息子を深がしに移動を始めることとした。

今から二十年ほど前、学生の頃に札幌でスキューバーダイビングの講習会があり、講義一日、実技指導が一日、中島プールであり、所謂、スキンドビングとスキューバーダイビングの基本を習ったのがそもその始めでありました。しかし小生の子供の頃は驚別で育ったこともあり、夏休みになるとゴーグルをつけて毎日海に潜ってある程度水になれていることもあり、割合簡単に扱えられた。その後は道具も高価であり、買うこともなく潜水のことは忘れて

いた。

五年前、息子が小学校へ入学した夏休み小生も夏休みをとって沖繩へ行き、息子にスキューバダイビングを教えながら遊んでいる間に、海水浴場内に泳いでいるカラフルな魚を見て本格的にスキューバダイビングをやる気になり、テストを受け、ライセンスを取ることにした。ライセンステストは二〇メートルの泳ぎ、マスクの水ぬき、シューノーケルの使い方、ボンベを背負って、足ひれをつけての一、〇〇〇メートルの泳ぎ等の比較的簡単なものであったが、いざ海洋実習となると、所謂、耳抜きと称するものがなかなか出来ず、この耳抜きとは耳管より水中気圧と同じ圧の空気を中耳へ送りこんでやることであり、例えて言えば、飛行機の上昇中の耳の状態が水の深さにより、急激に起こるものとおもえばよいのであるが、いざ実際に実行するとなると、潜る前に鼻をかみ、出たくないアクビをしようと懸命に努力し、鼻をつまんで耳管へ空気をいかに送るかと苦心惨憺している間に、一諸の講師はスイスイと五メートルほどの海中にて早く来いと手招きしている。一方小生は二メートル潜って耳が痛くなり、一メートル上がり鼻をつまんで空気を耳に入れては又、潜りと、苦心惨憺して三十分もかけてやっと五メートルほ

どの海底にたどり着き、回りをぐるりとながめまわすと、残念なことにボンベの空気の残りはほとんどなくなり浮上となる。今度は行きと違いさきほど苦心惨憺して耳へ入れた高圧空気はピキピキと音をたてどこかへ出ていってしまった。一回目は苦労したがコツを覚えるとあとは海中遊泳はいとも簡単だった。

一方、子供の頃の潜りは、コンブやホンダワラがあり水中は視界も悪く、ウニを採りたい一心に、ただ海の中でウニをさがすのが目的であり、コンブなどの海藻が足にふれた感じが何んとも気味悪かったが、各自に潜って採ったウニを焚火で焼いて食べたい一心で、又友達に助けたくなくて潜っていたが、沖繩の海は本に出ている写真の如く、視界はよく透明度もよく、何よりも北の海のような気味悪さがないので一層夢中になり、最近春、夏、冬と暇をみつければ潜りに行っている。

スキューバダイビングはフランスのジャック・クストーが一九四三年開発し、アクラングと名づけて水中でも胸腔が受ける圧と等しい圧の空気が吸える装置であり、一五〇〜二〇〇気圧の高圧の空気をつめたボンベからレギュレーター（デマンドバルブ）という装置により、その時の水中気圧と同じ圧力の空気を吸入した時のみ空気を

供給した上で海中でも呼吸が出来るものがあり、よく新聞などに出てくる如く、高圧の酸素を直接吸う装置ではない。ダイビングは写真などでみる様に、ネオブレンとカラゴム質で出来たウエットスーツ（防寒と体の保護のため）をつけ、その浮力をうちけすために鉛のウエイトをつけ、ボンベを背負い全部で重量は十七〜十八キロとなるが水中ではほとんど苦にならないものである。スキューバダイビングで水中のカラフルな魚をおいかけては息が苦しく、せいぜい二、三メートルの海中で魚の写真を撮っている間はあまり海中をゆっくり見まわす暇がなかったけれども、スキューバ潜水を始めると海の中へ入ると、楽々と海中にても空気が肺に入り、ボンベの空気が残っている間は海中にて呼吸が出来、一種の無重力状態となり、魚と一諸に泳ぐことも可能である。小生などは小学六年生の息子と一諸に潜っていることもあり、ただか十五〜二十メートルほどの深さしか潜らず、沖繩の海は太陽の光が強烈なためもあり、二十メートルの深さでも充分明るく、カラフルな魚も多く、水中カメラで海中の様子や、魚の写真をとる、時には珍らしい貝をみつければ少しづつ集めて、出来上がった水中写真をみてはニヤニヤしたり、採集した貝をみがいたりしては楽しんでる。

室蘭野鳥の会

太田 克英

日本野鳥の会室蘭支部が出来たのは、昭和五十五年十月一日だ。以前より早朝野山を歩いて、鳥や動物を追ったり、草花や木を観察し写真を撮って楽しんでる連中がいた。私も朝暗いうちに野山を歩いたり畠を作ったりしていた。たまたま、そうゆう連中にさそわれて、早朝、探鳥会に出かけに行ったりしていた。その頃は四、五人でさそい合って車で白老の飛生小学校や洞爺の中島へ行って朝の空気を吸って、野鳥の声を聞き、草花や木を見て楽しんでた。そのうち、日本野鳥の会から室蘭支部を作らないかと言ってきた。それには会員を少なくとも二十人位は集めなければならぬ。

誰でも彼でもさそって、やっと二十人になり、私が支部長となり、手続きをして室蘭支部が結成された。会員は中学生から六十代のお婆ちゃんまで雑多でしたが、草花の好きな人、狐や熊を追っている少年等、純粋な人々でした。事務局を私の家にして役員を決め、日本野鳥の会本部、各支部と

の連絡、年次計画の作成、会費の徴収、探鳥会の為の連絡等、結構雑用は多かったが好きな人もいて事務連絡等、よくやってくれた。次に支部報を作成することになった。もともと裕福な人達ばかりではないから、いかに金をかけないで作るかが問題である。表紙は私が鳥の絵を模写して描いた原稿が集って、編集する作業だが、結構、経験者がいて字句や行数の確認等、夜遅くまでかかって、やっと作り上げた。出来上りは皆が考えていたより立派すぎる位だった。ところが問題がおこった。プロの写真家なら当然気がつくはずだが、余白を埋める為に鳥類の図鑑から写真をコピーしたことだった。大げさに言えば版權の侵害である。それで借用した写真家全部に手紙や電話で連絡し、粗品を送って承諾してもらった。幸い誰からも文句を言われずに済んだが、室蘭支部の道義的失態と言われても仕方なかったかも知れない。

その頃、苫小牧のウトナイ湖がバードサンクチュアリーとなり。ネイチャーセンターとして建物が設立されることになった。隣の支部として、何とか応援しなければならぬと思っていたが、室蘭支部の方針として、野鳥の会の会員になった為、負担を感じたり、生活を規制されたりするのは、本来の目的に反する、ということで幾許か

の備品を寄付して、申し訳けを立てた。勿論、個人として身を挺して立派に協力した人達もいた。昭和五十六年五月十日に本部主催の盛大な記念式典が行われ、室蘭支部も参加したが、支部長としては身の細る思いだった。

野鳥の会と密接な関係にあるのは、自然環境保護団体と動物保護団体である。日本全国の問題でもあり、当然、政治問題になる。日本野鳥の会報や各支部報に取り上げられ、会の分裂がおきたりした。

趣味の会として発足した会が、そうゆう問題で離合集散するのはよくあることだが室蘭野鳥の会はうまく行っていると思う。私は家庭の都合で支部長を辞めることになった。幸い、次期支部長は若い人で立派な人がなったので安心している。これからは一会員として楽しみながら参加していくつもりです。



私のパッティング遍歴(Ⅰ)

久安正道

数年前のことです。私のパッティングがどうしようもなく、しかも持続的に乱れませんでした。1mのバットなど全く入る気がしませんでした。何とか30cm以内に寄れば少し安心という状態でした。どこをどう直したらよいのかも全く解りません。パターを次々に取り替えたのもその頃で、新しいパターにしても少しの期間は今までより多少良いのですが、すぐもとの木阿弥という有様です。プロにレッスンを受けたこともありましたが、その時はどうしてもドライバーやアイアンの方が重視され、パターにだけ時間を費やすわけにはいきませんでした。

結局、参考書、指導書が頼りとなったわけですが、ゴルフの本は沢山出ているので資料を集めるのには、さほど不自由はありませんでした。そしてある結論めいたものが浮び上がりました。それは次の二点です。

(一)、古今東西のバットの名手といわれた人のフォーム、打ち方、理論はすべて研究しつくされたが、万人に共通して最もよいというものは一つもない。

(二)、完全なパターというのは、この世に存在しない。

全くコロンブスの卵で、至極当然のことではあります。換言すれば、パッティングの上達を望むなら、「自分で、自分自身のフォーム、打ち方、理論そしてパターを選択して、ひたすら練習しなさい。」という答えが出てきました。

パッティングは極めて単純な基本的原理の上に成り立っており、簡明に表現されません。即ち「ボールの進行線の後方から、フェースを直角にボールに当てる」というのです。しかしこれだけではウッドもアイアンも同じことなので、少々補足しますと、「自分の決めたパッティング・ライン上でフェースを直角に合わせ、パターのスイートスポットでボールを打つ」ということになりません。パットと他のクラブのショットとの最大の相異点はスイングが小さいこと従ってパターヘッドの動きが極端に少ないという点にあります。2mのバットでは、バックスイングの大きさは人により異なりますが、約30cm程です。この30cmを目標線に沿ってストロークに振るにはどうするかというのがパッティング・ストロークの技術のすべてといって過言ではありません。パッティングは面白くないという人が多く、私も嘗てはそうでした。第一に巧くない

かないから。第二にグリーンの状態に影響される要素が多く練習の成果が現われにくいから。更にパッティングはメンタル90%ともいわれており、とすれば技術面(ストロークの技術とグリーンを読む技術)をたえ完全にマスターしたとしても、10%の価値では仕方がない様な気がするというのが大きき理由と思われまます。

その反面、パターヘッドの僅か30cmの動きの中に、実に色々な要因を盛り込んで何とか完璧なストロークを会得しようと試みる人々もいます。本来、単純であるはずのパットを事さら、複雑に難解にいじくり廻している感じがしないでもないのですが、この30cmに魅力を感じ、どんどのめり込んでいくのがパッティング狂といわれる人達です。どうやら私もその方向に近づきつつある気配がします。

メンタル90%といっても、人間心理の微妙なものを安定させる方法は誰も助言してくれません。結局、自分の力、技術面の自信だけがメンタルの比重を小さくし得る唯一つのものという考えです。

最近、「私のパッティング遍歴」と題した小冊を纏めました。特に目新しいことを記したものではありませんが、アマチュアの私が、素朴な疑問に迷い、情報過多の中を泳ぎ廻り私なりの練習の体験を織り込ん

だもので、勿論、バッティングの指導書などというものではありません。私自身、パットのスランプのとき、どこをチェックし、どう修正すべきかという自戒の書ではありませんが、パットに泣かされ悩まされている同好の士のバッティング開眼の一助にでもなれば、望外の俸せと思っております。紙面の都合で、今回は項目と、そのサブタイトルのみ紹介させていただきます。

○バッティングの参考書

多くのプロが全く相反したことを主張している矛盾が目につきます。又難解で誤りも見受けれます。内容を取捨選択する知識も養いましょう。

○パッティング・ストローク

パッティングは、両肩の中央を支点とするペンデュラム (Pendulum) とする振り子方式と、手首でボールを打つタップ (tap) 式だけではありません。その混合スタイルが最も多いのです。多分あなたも――

○ストロークの盲点

パターの構造そのものがパットを難かしくしていることに気づいていませんか、アドレスしたときシャフトはパターヘッドに垂直には附いていません。ストロークの時にこのことを加味して考えるべきです。

○テレビ・ゴルフ番組の利用

プロの技術を自分のものにでき得るのは、パッティングだけです。

○スコアー (バッティング・ゲーム)

ラウンドのパット数だけを記入しておいても、あまり意味はありません。グリーンにオンしたら是非距離もメモしましょう。色々なデータを集めますし、パッティングゲームも楽しめます。ゴルフとはパター以外のクラブのショットゲームと、パットと、二つの全くの異なるゲームを合せたものという考え方です。パッティングはスポーツとはいいいくいで、この様な考えも成り立つと思えます。

○スランプからの脱出

かなり古いお話

(その二)

小 雲 水

測量山を背景にまだ青空を残して、夕陽は室蘭八幡宮大祭の幟と森を真紅に染めて暮れなぞんでいた。土用、立秋も過ぎていてお盆でもあった。深緑で夏も峠であった

山道を行けば何時の間にか萩が静かに地に咲き、すすきも穂を出して逆光に映えて銀色に輝やき美しい。今年も秋が来た。夏至の頃に比べ。日の出も日の入りも一時

○パターの選択

自分のストロークに合わせて選びますが、種々試してみるべきです。即ち、今までと全く異なるタイプのパターを持つのも一つの方法です。どんなパターでもある程度練習すれば使えるようになりますがその後で今までの自分のパターを試してみるといかに容易にフィーリングを掴めるかということの再確認となり、愛用のパターの信頼度が増すというわけです。

(続く)

間位づつ短かくなっている。天気予報にも「秋雨前線」の名がさかんに使われはじめ静かな秋の夜長のはじまりとなった。

お孫さんが、もう大学生という老人から八月始めの暑い日の朝、鈴虫を貰った。老人が冬は温室で飼って卵から孵化させた幼虫達で一センチにもみたくない。大きな虫籠に胡瓜、茄子、その上蛋白源には鰹節や、金魚や小鳥用の栄養食まで添え、用意周到のお嫁入りとなり、その我が子を育てるような愛情と丹精ぶりにその老人の心が慰ばれて感動した。こまごまと育て方を教えて貰って、高低温それぞれの日々に窓を開けたり閉めたり、陽に当てたり蔭に入れたり老人の心を無にすることのない様に成長を見守っている。「一ヶ月もすれば成長してよい音で鳴く」とのことであった。そろそろ一ヶ月近くになり、かなり大きく三倍位になったが、もう少しというところである。先日「鳴いているか」と電話を貰った。老人宅では、よい音でもう鳴き始めたという。その日を楽しみに待ちかねている今日この頃である。

「小さい秋」や「里の秋」をテレビやラジオで唄っている。思ひ出の人々を偲び、なつかしむには秋がよい。これも私がその老人の一人となった所以であらう。

佐藤義臣先生

昭和五年輪西元町診療所に赴任され、豊福先生につづいて新日鉄病院長を昭和三十年に辞任される迄二十六年間在蘭された。つづいて青森県立病院に移られ、御健在では看護婦養成、その他沢山の役職嘱託で活躍されている。前医師会長齋藤義太郎先生とは親友で、青森に移られてからも度々来蘭されてお目にかかる機会が多い。斎藤先生未亡人も旅行の途、佐藤先生御一家と交歓され、今夏も室蘭に来られる予定と伺ったが御多忙とあつて来蘭されなかつた。先生は温厚篤実、敬虔なクリスチャンでもある。青森に移られてからも東京や京都の学会でお目にかかった。カラーテレビが始まって間もない頃、会場の東大で心臓手術のカラーテレビ中継があつて、丁度ここで佐藤先生にお目にかかった。その生々しさが今でも思い出に残っている。

室蘭に長かった佐藤先生にも院長在任中大きな御不幸が起つた。当時未だ少なかった交通事故で、お家の近くで目に入れても痛くない愛嬢が天逝されたことである。先生を語る時、私共も共に悲しんだこの事は忘れられない。その後の御来蘭も御供養の為であることに違いない。

伊藤長明君

その佐藤院長の愛嬢の御不幸のお通夜は蒸し暑い夏の夜で知利別方面に毒蛾が多く

発生し、伊藤君は白哲偉丈夫の顔や体に真赤で大きな発疹を一面に出し、痒い痒いを連発しながら紋付和服姿でお手伝いしていた様子が印象に残っている。

父君は、赤レンガ華やかな北海道庁長官沢田牛麿閣下の頃、たしか道庁にただ一人の勅任技師であつた。北大予科独語学級入学以来私と同期で寡黙、秀麗、清廉潔白の士であつた。或る日、北大植物園の芝生に寝ころんで日向ポッコをしていると、伊藤君が鼻をピクピクさせて「よい煙草の香りがする」と言った。大木の向うにシガーを燻らせて行く老紳士は沢田長官であつた。伊藤君には上等な舶来シガーの燻香の嗅覚がさりげなく身についていた。運動は万能でも草野球はクラスのピッチャーだった。ゴルフもその頃からたしなんでいた。道庁にはその頃自動車が外車七台位（もつともニッサン、ダットサンがようやく誕生する頃で国産はなかった）あつて、その外車を裏門前の路に乗り出して練習した。路は草ぼうぼうで北海道庁警察部の前であつた。

卒業後、君は今亡き武田先生の第一病理学教室を経て有馬先生の第一内科教室から新日鉄病院内科へ赴任、応召二回があつた。途中、軍医見習士官の姿で北大第二内科教室にやつて来たのを思い出す。室蘭で

は私よりかなり先輩であった。お酒は猛練習の甲斐があつて二人共かなり腕前を上げて強く、滅多にくずれたりはしなかつた。よく「オイ居るか」と小宅に来て一升徳利を空にした。そんな時でも知利別の留守宅へ電話連絡して子煩悩ぶりを窺わせた。自分の家の電話番号がわからなくて番号簿を調べる時はポケットから眼鏡を出してかけた。伊藤君も私もそれ迄は眼鏡は不要であつたので、「そんな年令になつたか」と笑うと、「お前も今に！」。それから二十余年経つた今、私も眼鏡なしには読み書きが出来なくなっている。そんな元氣だつた伊藤君が不治の病に倒れたのはそれから間もない頃であつた。煙草はあまり喫わなかつた筈の伊藤君が肺癌とは。

北大の恩師や病院の先生達によつて確認されたが、本人には肺結核とし、それに伴う右湿性肋膜炎で押し通すことに決まつた東大清水外科教授の手術を受け、開胸してすぐ閉じられ、清水教授から拇指頭大のツベルクロームであつて、このままでも（閉じても）心配ないと診断され安堵の顔で帰蘭した。当時から結核薬とその一種というようにして抗瘡剤も使われ始め、理学療法も施された。ツベルクロームは摘出を受ける筈が、そのまま閉じられたあたりにも、自分のことになると全く盲目であつた。抗

結核剤は何時迄経つても作用無く、症状は好転しない。当時、伊藤君の許には赴任後日も浅い熊谷先生と種田先生が付き添われ次第に悪化する胸部X線写真を、以前に撮つて未だ比較的軽症であつた頃の写真を入れ換えて本人に見せたり、万事「肺癌」を「ツベルクローム」にする為のムンドテラピーは本筋の正式療法より難かしく苦心惨憺されたことである。私も「結核でよかつた。その中必ず快癒だ」と激励するが病室を出ると空しさがこみ上げた。遷延し乍ら食欲もない日が多く、本州から到来の珍味等を持参して激励したがあまり効果はなかつた。札幌地区の同期生が十数人、交々お見舞に来て私の処がたまり場になつた。病室のお見舞には神妙であまり声を出す者はいなかつたが、その帰り小宅まで来ると、「オイ、お前、このボロ家にペンキ位新しく塗り替えんか」と叱られた。

とうとうすべてが無に帰した。勇気づけのムンドテラピーは是非はとも角、「瘡」にはヴェールを蔽つて本人は逝つた。あれからもう廿余年になる。傷心の未亡人はお子様達と一緒に東京に移転され、お子様方もそれぞれ立派に成人なされた。

平間章先生

京都府立一中から「都ぞ弥生」の北大に憧がれて入学、恵迪寮の住人となり、昭和

七年卒業第二外科教室（柳外科）に入り昭和十四年頃夫人の親戚で当時輪西の秋吉先生の御手伝いで来蘭、後に富士鉄（現・新日鉄）病院に勤務され、佐藤義臣先生の跡をついで同病院長になられ停年で輪西に開業された。北大予科の頃からスポーツ各種に秀でて、野球部で真正正銘の革ボールの投手であつた。名物の対小樽高商戦の春秋は私共応援団を沸かせた。敬虔なクリスチャンであつた。

熊谷弘夫先生御夫妻のお仲人をされたが平間先生は堂々としたお体格でお歳に比べておつむは少々後退型で立派なお仲人としてうってつけであつた。いつも会合に出席されると幕西坂を下つて当時のブラザーへがその頃の大方のコースで、すぐ近くの小宅にも寄つていただきお酒をつづけたこともある。備前焼の一升徳利を赤垣源蔵よろしく吊して御帰還になつた事もあり、かなりの酒豪であつた。

ある年のある夏の日曜日、当時企業に所属する女子野球チームと室蘭市医師会チームが蘭東中学で対戦した。娘チームと言っても現役で皆な大きく真つ黒で見えるからに強そうで、往年の本格派平間投手も伊藤長明投手も歯が立たず、バスケットボールからラクビー的な大きな点差で大敗し、あとは残念会となつて楽しんだ。

平素は健康で元氣一杯の先生ではあったが、時折強い坐骨神経痛や痛風様の腫れや疼痛があり蒼白のお顔にすぐ汗が出ていて私は氣になっていた。お元氣な壮年期に御他界なさったことは惜しんでもあまりあることである。

神田先生

古く輪西に開業され未だ病院の無かった日鉄の嘱託医で居られ、その後輪西一条法華寺、立雲寺の下に移転開院され活躍されたが、後に登別温泉ケール会社専務の御子息と高砂町に同居隠居され逝かれた。元氣一杯であった老先生の面影が偲ばれる。

石井康子先生

父君は旧姓中野、後に石井家に入り石井安弥先生。安弥先生は輪西五条に開院され端正なお体格で服装容姿は何時も正しく態度厳正であったが敗戦前に逝かれ、父君の跡をついで開業なさっていた。今は本州で結婚され御幸福である。

今井真七郎先生

東栄先生より七年位前に輪西六条の今の成松先生の処に開院され、温厚篤実な先生であったが、昭和三十五年頃札幌の息女御夫妻の許に移転され、間もなく直腸癌で逝かれた。もの静かな温顔が今でも眼に浮ぶ

◇ ◇

輪西の先生方については長老東栄先生か

ら御教示をいただいた。

東先生や他に故人となられた諸先生方、思い出に残る懐しい方々、三和クラブの方々のあれこれは、すでに紙面を過ぎていたので次号にゆずりたい。

「ほやき」

阿部 昭 治

「波久鳥」への投稿依頼をうけたものの何となく億劫で、今年は遠慮をと決め込んで居たのだが、思い直して筆を執ることにした。

昔から教育教養のイロハと考えられて来た所謂「読み書き算盤」が蔑ろにされ、これに代ったテレビ・マイコン・電卓等に逐いまくられて、活字文化はいよいよその影を薄くしつつある昨今ではある。

これでは不可ないと歎き乍らも、この潮流の中に巻き込まれて居る愚味な大衆の中に、時々自分自身の哀れな姿を発見しては反省する事も再三である。この渦中から這い上るには、いささかの努力が必要で、この稿も少しでもそのための頭の体操とまなれば幸いとも思っている。

それに最近、折にふれて能力にも脳力にも減退をしみじみと感ぜられるようにな

り、熟年などと耳障りのよい言葉に甘んじて自慰しているよりは、例え拙なくとも、字引を片手に忘れかけた漢字を思い出し乍ら小文を綴るのも、日頃この様なことに無縁な私だけに、これが老化防止への一助ともなればと考えて、寄稿することにした訳である。

さて、既にこの文中でも「マイコン」・「電卓」という新造語を使用して来たが、実はこの単語には何か奇異とも言える様なひっかかりが感ぜられてならない。

「マイコン」「O・A」等の語は、最近新聞広告等で瞥見する機会も多く、「電卓」も日常語として、何の抵抗もなく使用されているが、今こうやって自らのペンで原稿用紙にこの語を記すたびに、異和感が感じられ、口にしたら飯粒に混った一粒の砂礫の様に、歯のみならず頭にもカチンと来ってしまったのである。

「マイコン」等はまだ許せるにしても、「電卓」という文字にはどうにも我慢がならない。正に吐き出さなければならぬ小石そのものである。

勿論この語が「電子式卓上計算機」の略であること位は、誰にでも想像つくことだが、これを「電卓」と略したセンスが私には鼻もちならないのである。と言うのも「電卓」の二文字からは、計算機のイメージ

は全く浮んで来ないからである。

それにしても単に語呂がよいと言うだけで、無意味な漢字を抽出して並べただけで、新しい略語を作るといふ無神経な発想は嘲笑すべきもので、情意の裏打ちのない知のみに長けた計算——流石に電卓メーカーらしいが——には寒心の他はない。

更に困ったことは、この二文字が電卓の普及と共に、何の抵抗もなく全国津々浦々迄を席捲してしまったことで、これを傍観したマスコミ始め現代の日本人の漢字に対する無感覚さに呆れると共に、その漢字教育の無定見・没常識には一喝を加えたく思うばかりである。

今や「電卓」は商標でなく、完全に固有名詞化してしまった憾がある。試みに辞典を繙いて見ても、広辞苑には載っていないが、日本国語大辞典には立派に記載されているから驚きである。これに較べると、蟻の殺虫剤であるアリトールと言う商標名の方が、余程ましな日本語と言えよう。

本来誰が考えて見ても、「電卓」なる二つの漢字からは、計算機を想像出来る筈はなく、これもこの無関係な両者を間違つて結び付けたことに、人々が馴化された結果で、これでは単なる条件反射に他ならず、ベルと垂涎との関係と同様と言うことになる。

これは漢字の表意的機能、思想的内容を軽視する最近の日本人が、クパプロフの犬々に迄墮落してしまった證據ではなからうか。

少なくとも私の感覚から言つて、「電卓」と言う語から受ける印象を具象化すれば満艦飾の様に電気器具を必要以上に並べた学童用の勉強机か、若しくは電気調理器で重裝備された食卓と言うことになる。

「電卓」が登場した当時は、成程それ自体卓上型であつたから、よし百歩譲つて電卓を肯定したにしても、現在のそれはどうであろうか。今や「電卓」は、懐中型、掌中型はおろか、腕時計の中に迄組み込まれてしまつていゝのではないか。

いい加減な名称を付けるからこの様な状態になるので、それにも拘らず、相も変わらず「電卓」と言う文字に拘泥固執している処がどうにも我慢ならない。勿論、略語も小型化、軽量化の一種と考えても差し支へはないだろう。しかし文明の利器である筈の「電卓」も、小型化、軽量化が行き過ぎでは、却つて不便利な代物になり果ててしまふ憾もある。

受験生には電卓付腕時計は御法度、老眼族には旧式の大き目の電卓の再登場を願うが如き破目に追い込まれているのが現状でこれも考えて見れば馬鹿氣た話である。

韓国の学者も、今日の日本経済を評して「小型化、軽量化に尽きる。必ず限界がある筈。」と喝破して居るが、ラジカメ・ラジカセ等々のI・C製品だけでなく洋傘迄二折から三折にしたが、この辺迄は許容範囲の様で、「電卓」の如き名実共に本質を誤つた小型化、軽量化は、混乱の原因にかなり得ない。

兎小屋に住むのも小型化の流行を追つた訳ではないだろうが、これとてカプセルホテルに至つては兎小屋どころか、ブローラーの籠と言つた感じで、「大きいことは良いことだ」と言う台詞は何処に行つたのだと思いたくなくなつてしまふ。

漢字は表音記号でなく、表意記号であると言ふ本質を忘れた簡略化が、「電卓」なる語を固有名詞にしたのと同様、何でもミニ化、軽量化、簡略化すれば事足れりとする風潮に対して、誰かが警鐘を乱打しなれば日本人は総パブプロフ犬化し、総ブローラーに退化して行くのも間近かなのではないかと危惧するのである。

以上でペンを止めたいと思うが、拙文を讀み返して居ると、「昭和一桁は何を下らぬ事を云つて居るのだらう。」と二桁族のわらい声が聞えて来る。

確かに下らない問題と云えばそれ迄であるが、このまま放置されたならば、日本人

の長い生活の軌跡である古典も伝統文化も泣き泣き宙に浮いてしまうのではないかと思うのである。

下らないものだと思わせる様な二桁族の受けた国語教育そのものが問題なのである

森塚先生からの書簡

極暑の候、貴兄には益々御健勝の由大慶至極に存じます。降って小生離蘭以来、矯正局医務課長として昭和五十二年まで勤務して居りましたが、愚妻脳軟化症となり、五十五年五月脳卒中にて他界致し、目下やもめ暮しです。現在油絵等楽しみにして居ります。長男が近くで薬店を開業し、次男は仙台国立病院の婦人科課長、長女は札幌澄川内科クリニックを昨年開業した婿と奮闘しているようです。近況概要報告しましたが、小生心不全と高血圧のため療養中です。終りに御健康を祈って擲筆します。昭和五十七年八月

宮城県仙台市弓の町五丁目 森塚威光
皆川英貞先生

編集後記

今号も依頼しました先生方ばかりでなく、沢山の原稿が集り感謝して居ります。

高橋清蔵先生。悠々自適の生活、うらやましい限りです。御自愛を。

川口柳之助先生。現在の紳士のお姿から一寸想像出来ない半面を知りました。今後会合には屢々出席して下さい。

安斎哲郎先生。格調高い文章有難うございました。

徳田敬太郎先生。大川原修二先生立派な御趣味うらやましく思いますが、大変な出費でしょうね。

久安正道先生。論文と言うべきです。続編を期待します。

小雲水、高橋陽夫、加藤治良、阿部昭治の各先生、毎号の健筆有難うございます。

池田洋二先生。国本鎮雄先生。先人の遺徳を偲び敬意を表します。

湊武雄先生。即興の味、大変風流に感じます。

皆川先生の短歌。宮本、大久保両先生の遺句、毎号有難うございます。

座談会。荒れ模様でしたが、加藤先生がよく纏めて下さいました。

モータリストクラブ、三火会、益々ご発展を祈ります。

今年親交会発会三十周年に当りますので、記念号を考えましたが、雑誌の方は三年目でその期熟せずと前号誌を踏襲した内容になりました新しい先生方から懐古談が多過ぎると言う声がありました。昔の話を忘れない内に記録して置き度いとの意図もあり、そのような傾向になりました。本号にはその意味で発会以来の物故会員と転出旧会員の名簿を掲載しました。御連絡に利用下さい。次号からは斬新な企画にもって行きたいと考えて居ります。当編集委員も大幅に交替してマンネリを打ち破りたいと思しますので、希望の方がおいででしたら申越し又はご推薦下さい。最後になりましたが、毎号装丁カット等に協力下さいます加藤治良、吉井正仁、竹内隆一の各先生と、いつも無理を聞いて下さいます室蘭印刷の皆さんに感謝を申し上げます。

編集委員を代表して 大岩昌生

MEMO :

親交会誌
波久鳥
発行日 昭和五十七年十月二十五日
発行所 室蘭市医師親交会
印刷所 室蘭印刷株式会社